

## 支部沈黙と戸田甚一

—戸田が同人誌『囁き』に投稿した20の作品を手掛かりに—

塩原将行

はじめに

1. 謄写版刷の『囁き』の所在発見の経緯
2. 『囁き』—その概要と発起人支部沈黙—
3. 『囁き』と戸田甚一
4. 支部と戸田の交友
5. 戸田甚一が投稿した各作品について

おわりに

はじめに<sup>(1)</sup>

本稿は、戸田甚一（後に城外、城聖となのる）の上京前の数年間について、彼が小学校高等科2年生の時の担任教師であった支部沈黙（本名、貞助<sup>(2)</sup>、1892—1969年）との交友を、支部が厚田村で創刊した同人誌『囁き』<sup>(3)</sup>を手掛かりに解明しようとするものである。

戸田にとって支部沈黙は、小学校の恩師にとどまらず、少年期から青年期にかけて大きな影響を与えた人物と考えられる。戸田の上京によって二人の繋がり、ひとたびは途切れたかに見えたが、戸田の死後支部が亡くなるまで堅持されていた。

『囁き』は、1918（大正7）年2月に北海道厚田郡厚田村（現在の石狩市厚田区）の厚田尋常高等小学校（以下、文中は「厚田小学校」と略す）の訓導であった支部沈黙が、主に同村在住の青年男女と始めた月刊の文芸同人誌である。

『囁き』が創刊された頃、戸田甚一は既に札幌で働いていたが、囁き会の会員となり、20の作品を投稿している。この『囁き』への投稿は、戸田の伝記では、わずかに中本博が、妹テルとの

---

(1) 本稿における文中の下線、[ ]の挿入や、判読できない文字を示す■は、すべて筆者によるものである。人名は敬称を略した。

(2) 本名の読み方は、1950（昭和25年）9月24日に作成された支部貞助自筆履歴書（以下、「支部履歴書」と略す）（支部黎子所蔵）による。教師としての支部は、「支部貞助」であるが、本稿では、広く知られている支部沈黙という表記で統一した。

(3) 『囁き』は、『さゝやき』等の表記もされているが、本稿では、引用を除き『囁き』で統一した。

会話として「沈黙先生には、小六時代にも文章の面で世話になったよ。謄写刷の雑誌“囁き”と  
いうのを出している。兄さんも二、三書いたよ。」<sup>(4)</sup>と書いている。しかし、その記述は正確  
とはいえない<sup>(5)</sup>。なぜなら、中本も『囁き』を実際に見ることはできなかったからである<sup>(6)</sup>。  
『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』（第三文明社 1993年）や『創価学会三代会長年譜 上巻』（創  
価学会 2003年）では、『囁き』への投稿については全く触れていない。『囁き』の存在に言及し  
た論文として、「厚田今昔物語」に着目したアンディ長島・長島勝雄「戸田城聖と厚田尋常高等小  
学校の恩師・支部沈黙」（未公刊 2007年）がある。

本誌本号の資料紹介（278-292頁）において、戸田甚一が『囁き』に投稿した20の作品を翻刻  
して紹介している。この内訳は、散文8篇、詩4篇、短歌4首、俳句12句である。このうち18作  
品は、投稿した作品の部分の複写（コピー）が2011年春に発見された。しかし、各号の表紙や奥  
付は含まれていなかったため、掲載時期は不明であった。本稿作成にあたって筆者は、90年以上  
前の原資料が今後見つかることは難しいと考え、発見されたコピーの情報等から、『囁き』の全体  
像と個々の作品の掲載年月を明らかにすることを目指した。

平行して、原資料の探求にも努めてきたが、2012年3月8日、ついに『囁き』第1号から第13  
号が見つかり、原資料にもとづいて加筆することができた。そのため、全体の構成と記述は最初  
に発見されたコピーにもとづいていたが、原資料によって加筆することができた。

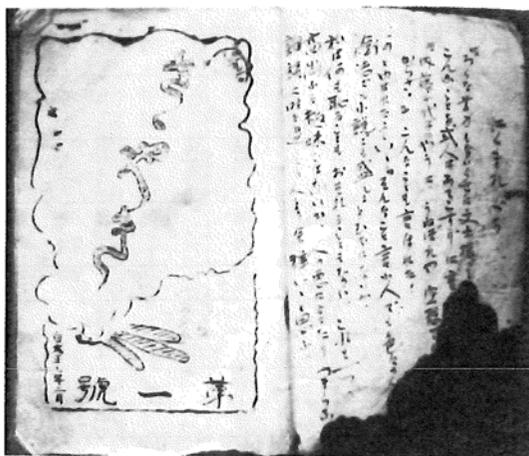


写真1：『囁き』第1号の表紙（『落日』より転載）

(4) 中本博『若き戸田城聖（三）』（和光社 1976年）、154頁。

(5) 『囁き』は、戸田が小六商店を辞める頃に創刊された。また、投稿は、「二、三」ではない。

(6) 中本博『若き戸田城聖（二）』（和光社 1975年）、266頁には、「寂しき厚田」を最後まで引用している。  
「厚田今昔物語・6 戸田城聖のことなど —その4— —ご利益のある信仰—（以下「厚田今昔物語・  
6」と略す）」（『北海道教育評論』第22巻第4号、北海評論社、1969年）、67頁では、「寂しき厚田」の最  
後の部分が略されているので、中本は『丘のひまわり』（昭和堂印刷 1958年）から引用した。

### 最初に発見された複写（コピー）資料の状態

『囁き』のコピーは、聖教新聞社内で、以下の状態で発見された。

1. コピーはA4で、全部で28枚。それぞれ見開き2頁が複写されている。複写されているのは、戸田の作品が掲載されている見開き頁に限られる<sup>(7)</sup>。
2. 等倍であれば、『囁き』は、B6（128×182mm）位である。
3. 表紙および奥附は複写されていない。
4. 頁の表示方法が2種類ある。頁の表記が和本のように横にあり、漢数字（字の半分しか読めない）で表示されているタイプと、頁表記が上にあり、算用数字で表示されているタイプである。

### 本稿の作品番号について

本稿では、発見された28枚のコピーを上から順に、それぞれの紙に「コピー番号」をつけることにした。「発見された状態」には、何らかの理由・意味があると考えたからである。次に、「コピー番号」とは別に、発見された28枚のコピーの下の作品から順に、1から18まで「作品番号」をつけた。その際に、同時に発表された短歌と俳句は、複数でも1作品とした。本稿を起すにあたり、それぞれのコピーにある作品の発表時期の特定を重要視したからである。この段階では、作品数は18である。また、作品6と13は、作品の後部が欠落していた。

### <資料1> コピーにあった戸田甚一が『囁き』に投稿した作品等

作品番号	題名	種別	ペンネーム	頁の位置	コピー番号	コピーに書かれた頁数	備考
1	寂しき厚田	散文	櫻桃	横	26-28	五、六、七、八	大正7年5月号 (通号4号)
2	顔知らぬ友の病めるを聞きて	散文	あかん坊	横	24、25	■、■、■	
3	若人	詩	あかん坊	横	22、23	[五]、六、七	
4	俳句	俳句	あかん坊	横	22	六、七	作品3と同じ号
5	◎	散文	あかん坊	横	20、21	九、十、[十一]	
6	孤獨になく乙女	散文	あかん坊	横	19	十、[十一]	作品の後部欠落
7	世の中	散文	あかん坊	横	18	十一、十二	
8	俳句	俳句	あかん坊	横	17	十七、十八	大正7年9月号 (通号8号)
9	楽しかった旅日記	散文	あかん坊	上	15、16	0-3	大正7年11月号 (通号10号)
10	招魂祭	散文	あかん坊	上	13、14	40-43	作品9と同じ号
11		散文	あかん坊	上	12	8-9	
12	くどき節	散文	あかん坊	上	11	30-31	作品の後部欠落
13	きかれたら答へたい	散文	あかん坊	上	9、10	34-37	
14	南瓜	散文	あかん坊	上	7、8	38-41	作品13と同じ号

<sup>(7)</sup> 作品の最後まで複写されていないと思われる詩、散文が各1点あった。

15		和歌	あかん坊	上	1、6	48-51	
16		俳句	あかん坊	上	1	50-51	作品15と同じ号
17	故郷	散文	あかん坊	上	1、2	50-53	作品15と同じ号
	さゝやき欄			上	2	52-53	作品15と同じ号
18	私のすきな月夜	散文	あかん坊	上	5	22-23	
	会員及投稿規定			上	3	頁なし、30	
	囁きらん*			上	3、4	頁なし、30-31	会員及投稿規定と同じ号

\*コピー番号2に対する戸田の投稿が掲載されている。[ ]は、文字を判読できないが、頁数は明らかなので記した。

このように作品番号をつけたのは、『囁き』の約1年間の存続期間の中では、発見された状態のコピーの下の方にあったものほど初期の作品になるのではないかと考えたからである。それは、以下の理由による。

1. 『囁き』への掲載年月が特定できる作品が、3つ（資料1の備考）あるが、その掲載年月は、コピー番号が若いものほど後のものである。
2. コピーの頁を表示する数字の位置は、コピー番号1から16までの紙は、頁の上であり、算用数字で書かれている。コピー番号17から28までの紙は、頁の横にあり、漢数字で書かれている。後者は、和本に見られるような用紙中央下に漢数字で頁を表記し、二つ折にして綴じられている。写真2では、第4号に掲載された支部の作品「点滴」は後者のタイプ、第10号に掲載された「雑草を薙ぎ倒した少年」は前者のタイプである。<sup>(8)</sup>
3. 戸田は、2つのペンネームで投稿している。コピー番号の最後の26から28の「寂しき厚田」のみが「櫻桃」というペンネームを使い、他の17作品は、「あかん坊」というペンネームを使っている。「寂しき厚田」は、通巻第4号に掲載された初期の作品である。
4. コピー番号3と4にある読者交流の「囁きらん」は、支部の転地療養と投稿先の変更を伝えている。これは、創刊から約一年後、『囁き』の最後の頃に掲載されたものである。
5. それぞれの作品について創作時期を推定すると、コピーの上にあった作品より、下にあった作品の方が創作された時期が早い。
6. 『囁き』については、いままでその存在がほとんど知られていない。それは、このコピーが出処不明のものとして全く利用されなくて、複製したままの状態でおかれていたからではないか。

<sup>(8)</sup> 支部沈黙『支部沈黙作品集 落日（以下『落日』と略す）』（支部松代 1977年）、54-61頁、26-29頁。

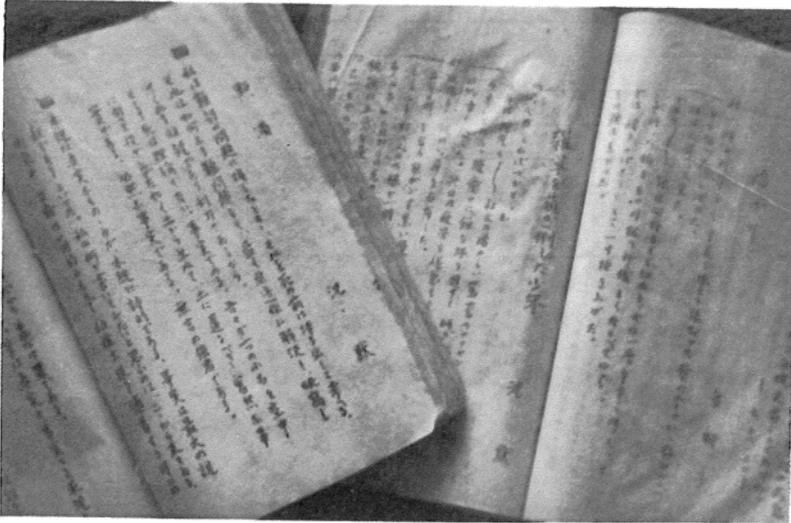


写真2：『囁き』に掲載された支部沈黙の作品（支部家所蔵の写真を複写）

## 1. 謄写版刷の『囁き』の所在発見の経緯

最初に、謄写版で刷られた『囁き』の所在発見の経緯について述べる。2011年春に発見された戸田が投稿した部分のみのコピー以外にも、以下のように今まで『囁き』にふれた言及や『囁き』を撮影した写真は存在した。これらの情報を精査し、可能性ある場所にひとつひとつあたることにより原資料の所在の調査を行った。

### ① 1957（昭和32）年、支部沈黙は『囁き』発行当時の写真などを厚田村で閲覧

支部沈黙は、1957（昭和32）年6月に同村を訪問した。1919（大正8）年に厚田村を離れてから38年振りのことである。同年6月の日記に、

私達のやってくることを和尚（津川君）が、ふれて居つたものと見えてこのようにわかっている者もあつた。あの頃、「囁き」という謄写刷りの雑誌を、やつたことがあつて、それに、村の青年男女の何人かも入つていたのだが、その時の写真などを、さつきお寺で出して見せてくれた<sup>(9)</sup>。

とある。戸田と同年5月に再会した翌月のことである。なお、この「お寺」に支部が見たという写真などが今も残っているか、現住職に確認したが残っていなかった<sup>(10)</sup>。

<sup>(9)</sup> 支部沈黙『新日記 白樺 1957年 別号三 厚田こんにやく記 厚田今昔物語 昭和三十二年六月記（以下『新日記 1957年』と略す）』、125—126頁。

<sup>(10)</sup> 山口朝也の調査による。

② 1958（昭和33）年、支部沈黙は『丘のひまわり』に再掲するため『囁き』を借用

支部沈黙が『囁き』について初めて言及した作品は、1958（昭和33）年9月出版の『丘のひまわり』<sup>(11)</sup>である。その中に、「大正七年、私が中心になつて、「囁き」という謄写版刷の小雑詩<sup>(ママ)</sup>を、毎月出していた（中略）。ものずきにも、一年分を合本して、保存していた人があったので、それを借りて転載した<sup>(12)</sup>とある。

支部は、『囁き』創刊の約1年後に病氣療養のため厚田小学校を退職、その後、本州各地などを転々としたため、『囁き』を所持していない<sup>(13)</sup>。同年4月に亡くなった戸田城聖（甚一）の作品を掲載したいと考えた支部は、「一年分を合本して、保存していた人」から借りて「寂しき厚田」を転載した。同年6月7日の日記には、「児童文集に入れる、戸田城聖の文を、『囁き』から選んで昼のうちから書きはじめる」<sup>(14)</sup>とある。

③ 1977（昭和52）年、支部松代が『囁き』の持ち主を思い出し『落日』に収録

『丘のひまわり』出版から19年後、また、支部沈黙没後8年となる1977（昭和52）年に、支部の妻松代は、支部が『囁き』に載せた作品を『支部沈黙落穂集 落日』（以下『落日』と略す）に収めて出版した。その経緯を同書「あとがき」に、「[前年の秋]加藤郁代さんが“ささやき”という文芸雑誌を持っておられる筈だと、沈黙がいつか口にしていたことを思い出しました」<sup>(15)</sup>と書いている。

『落日』には、沈黙の作品と共に、『囁き』第1号の表紙の写真が掲載されている。また、加藤が持っていた『囁き』が、1918（大正7）年2月の第1号から1919（大正8）年3月の第13号までであると書かれている<sup>(16)</sup>。『落日』には写真1が掲載されているが、支部家には写真2が所蔵されていた。

④ 1978（昭和53）年、『聖教新聞』北海道版に戸田が『囁き』に投稿した作品を紹介

『聖教新聞』1978（昭和53）年3月1日、9面（北海道版）の「厚田詩情」に、戸田が『囁き』に投稿した「私のすきな月夜」の一部が紹介されている。筆者である「高」氏は、謄写版

<sup>(11)</sup> 支部沈黙編『丘のひまわり』（昭和堂印刷 1958年）。

<sup>(12)</sup> 同上、104頁。

<sup>(13)</sup> 支部沈黙が晩年住んだ江別市の情報図書館に、彼の旧蔵資料が2007年6月に寄贈された。「支部沈黙関係資料」として所蔵されているが、『囁き』は含まれていない。また、支部没後に出版された『支部沈黙作品集』上、下巻（北書房 1970年）にも、彼が『囁き』に載せた作品は未収録であり、同書年譜にも、『囁き』には言及していない。

<sup>(14)</sup> 支部沈黙『日記 第七号』。

<sup>(15)</sup> 『落日』、164頁の「あとがき」によれば、加藤郁代の旧姓は大橋で、厚田村の隣、当別村の出身で、「沈丁花」のペンネームで投稿していた。補足すれば、加藤は『囁き』創刊時10人の会員で「草籠」でも投稿。

<sup>(16)</sup> 前掲『落日』、目次および9頁。本文66頁には、「第十三号（大正八年六月ごろ）」と書かれているが、第13号の「編輯室から」には、「今月の発刊が後れましたから四月の〆切は四月の十五日に致します」とある。第13号は、4月15日以前に発行されている。

刷りの『囁き』を見ている。なぜなら、この作品は、他には転載されていないからである。

⑤ 1979年（昭和54）年、写真集『戸田城聖』に『囁き』の写真が掲載

1979（昭和54）年に出版された写真集『戸田城聖』<sup>(17)</sup>に『囁き』の写真が出ている。撮影に同席した飯田俊雄の証言では、浜益村郷土資料館の囲炉裏の傍で撮影したとのことである。戸田の作品「寂しき厚田」を開いた綴りと、表紙に「囁き 二集」と書かれた綴りが撮影されている。

①は、『囁き』を見ていないので除き、②から④の『囁き』は、同一のものであろうか。③は支部沈黙の記憶を妻松代が思い出したので、②と③は同一と思われる。同じ一年分でもあるが、同一であることは合本を意味する。次に、④と⑤は、同じ聖教新聞社職員が関与しており、同じく同一のものと考えられる。なお、聖教新聞社内で発見された28枚のコピーは、⑤の撮影と関連して複写されたものではないかと考えている。

見つかった『囁き』は、③の支部松代が加藤郁代から借りた合本の綴り2冊である。これは、②と同じものと考えられ、また、⑤で撮影された『囁き』の綴りの表紙の絵と、見つかった『囁き』の綴りの表紙の絵は同一である。また、コピーにある書き込みと③の書き込みが一致した（大正8年1月号、49頁）。つまり、②～⑤および28枚は、同じ加藤郁代旧蔵（現在は、加藤八重子所蔵）の綴りを撮影もしくは翻刻複写したものである。

『囁き』の大きさは160ミリ×238ミリで、筆者が受け取ったコピーは等倍ではなかった。



写真3：加藤郁代が保存していた『囁き』合冊

<sup>(17)</sup> 『戸田城聖』（聖教新聞社 1979年）。写真集のため、頁の表示がない。

## 2. 『囁き』—その概要と発起人支部沈黙—

## a. 『囁き』の発起人と創刊について

『囁き』の創刊について、支部沈黙は、1918（大正7）年の出来事として、

わたし達は同僚（大場、伊藤）と、主に村の青年男女を相手に“囁き”という謄写版の月刊誌をはじめた。もちろん文<sup>(マ)</sup>字<sup>(ジ)</sup>というほどのものではない。雑文・詩歌・俳句なんでも勝手なものを載せる。規約としては、小学校卒業以上の有志といったようなものであった<sup>(18)</sup>。

と書いている。また、支部松代が、「編集も発行人も沈黙で」<sup>(19)</sup>と書いているように、『囁き』は、支部を中心として創刊された。発起人となった支部沈黙（貞助）、伊藤留吉<sup>(20)</sup>、大場甲馬の3人は、ともに厚田小学校の訓導（教員）である。3人が同校に在職した期間は次の通りである<sup>(21)</sup>。

## &lt;資料2&gt; 『囁き』の発起人となった厚田尋常高等小学校の教員

No	氏名	厚田小学校の在職期間
1	支部貞助	1913（大正2）年9月29日～1919（大正8）年4月10日
2	伊藤留吉	1914（大正3）年6月6日～1920（大正9）年3月26日
3	大場甲馬	1918（大正7）年1月25日～1918（大正7）年5月

『囁き』第1号、21頁には、第1号の印刷日と発行日が共に大正7年2月21日となっている。支部は、『囁き』を始めたのは、その二月か三月か。たしか二月からであったかも知れない<sup>(22)</sup>と書いている。また、文末に「大正七・二・二〇」と書かれた支部の作品<sup>(23)</sup>が、第1号に収録されている。加藤郁代旧所蔵の『囁き』の表紙7冊に、「支部図案」と書き込みがある。

『囁き』第1号には、次の「発刊の辞」が掲載されている。

近來文藝の發達は驚くべき進歩を示しつつあるは、實に斯道のため喜ばしき限りなり。  
向運なる現代思潮に鑑み山水佳勝なる我が厚田に<sup>(マ)</sup>孤々の声を揚げしは、是ぞ「ささやき社」と名銘す。  
専ら惰性を斥け続行主義を固持し、眞に文學味を娛樂に供せん発心なり。吾等幼稚にして趣味を貫徹すること難波なりと雖も、幸ひ賢明なる諸子の眞情籠れる御後援のもとに逐次内容を充實し唯一の娛樂機關たらん主意なり。  
東雲低迷のシーズン諸子の御助力により創立することを得しは我等の衷心歡喜に堪えざると共に満腔の

(18) 前掲「厚田今昔物語・6」『北海道教育評論』第22巻第4号、306—307頁。彼の最後の作品。

(19) 前掲、支部松代「あとがき」『落日』、165頁。

(20) 伊藤留吉は、1931（昭和6）年8月2日、3日、牧口も講師をつとめた郷土教育講習会に参加している。その修了証の写真が、『創価学会 北海道広布40年史』（聖教新聞社 1994年）、344頁に掲載されている。

(21) 『開校百周年記念誌 みよし』（厚田小学校開校百周年記念事業協賛会 1977年）、13頁。

(22) 「今日は三月二十八日」（前掲『支部沈黙作品集 下巻<散文編>』、235頁）。

(23) 前掲『落日』、15頁。

赤誠を以て謝意を表し、併せて正道を鼓呼し斯道に発表せんとす。一言以て発刊の辞となす。

また、第1号の「編輯室から」では、支部沈黙が創刊の動機を次のように書いている。

吾々は徒らに時代の思潮や主義に浮んで流行を追ふものではありません。

近頃文藝雑誌がいたる所に見られますが、それを見た爲の好奇心から吾々の「囁き」が生まれたのではありませんでした。假令それが醜いものであり、小さいものであつても、吾々自身を寫す鏡が欲しかったのです。吾々自身を叫ぶべき口が心から欲しかったのです。斯うした抑へることの出来ない眞の欲求から吾々の「囁き」が産まれたのです<sup>(24)</sup>。

最後に、『囁き』を合本して保存していた加藤郁代は、「ささやき 一集」と思われる（表紙一部欠損）綴りの表紙裏に次のように書いている。

にくまれぐち

『ろくな學力もないくせに文士振つて・・・  
こんなことを、或人はあてこすりに言・・・  
『内藤千代子のやうに、うぬぼれや空想で・・・  
からさ。』こんなことも言はれた。  
何といはれたつていゝ。そんなこと言ふ人でも色々の人・・・  
雑論でも小説でも盛ん■■■■ではないか、  
私は何も恥ることも、おそれることもない これも一つの  
高尚なる趣味ではないか、人の悪口言 [つ] たりつまらな・・・  
議論に時を過して人より余程いゝと思ふ。

■は、判読不能。脱字は、[ ] で加えた。・・・は、欠損部分。

支部は、厚田村という土地について日記に書いている。

なんの変哲もない漁村だが、どういふものか、ここの自然と人生には、何かしら文学的なものを育ててくれる、<sup>あざ</sup>脂をもっているもののように、わたしは、今でもそう考える。よしんば狭く文学的といわなくとも、何か道徳前の自由性ともいふべきものをもっているように思われる<sup>(25)</sup>。

『囁き』の誕生には、支部沈黙は不可欠であったが、厚田の自然と人々にも何かしら文学的なものを生み出す土壌があつたのであろう。それは厚田の豊かな自然とともに、厚田小学校を軸にして次の世代を担う子ども達を大事に育ててきた厚田村の人々の意識<sup>(26)</sup>が深く関係しているの

<sup>(24)</sup> 前掲『落日』、15-16頁に収録されているが、本文は『囁き』1918（大正7）年2月、22頁の表記に従つた。

<sup>(25)</sup> 『新日記 1957年』、133-135頁。

<sup>(26)</sup> 一例として、『北海道毎日新聞』1896年8月29日、2面には、「厚田の學事」として「厚田郡の學事は村民の熱心盡力により漸く面目を一新したる由必竟するに折内校長の誠實にして勉強なるより戸長も村民も一体となり何事によらず資材を吝まず勞力を厭はず親切に世話するに至れるならん」と過日石狩の砲工

ではないか、と筆者は考えている。佐藤松太郎もその一人である。<sup>(27)</sup>

## b. 『囁き』の会員と投稿規定

『囁き』には、次のような「会員及投稿規定」が掲載されている<sup>(28)</sup>。

### 会員及投稿規定

- 一、小學校在學生ノ外何地何人ヲ問ハス入會スルコトヲ得
- 二、會費ハ毎月拾錢投稿メ切日迄ニ納ムルコト但シ雑誌ノ郵便ヲ要スル者ハ二錢増スモノトス。送金ハ爲替又ハ二錢切手トス。
- 三、投稿種目ハ散文和歌俳句、新詩其他一人ニテ何種ヲ投スルモ差支ナケレドモ八百字内外トス各種別紙ニ認ムルコト
- 四、さゝやき欄ハ一人二十字詰五、六行位ノコト
- 五、原稿ハ階書又ハ行書ノコト
- 六、原稿ハ種目毎ニ別紙ニスルコト
- 七、投稿メ切ハ毎月五日限リトス五日以後ノ分ハ次号ニ掲載スルコトアルベシ。

この投稿規定等から、次のような『囁き』の概要が見えてくる。

1. 後年、支部は、会員について「小学校卒業以上の有志」<sup>(29)</sup>と書いているが、規定には、「小學校在學生ノ外何地何人ヲ問ハス入會スルコトヲ得」とある。希望すれば誰でも会員になれた。「小學校」とは、無意識に厚田小学校を想定している。
2. 「但シ雑誌ノ郵便ヲ要スル者ハ二錢増スモノトス」とあるように、厚田村以外にも会員がいた。
3. 支部松代が、会員名簿<sup>(30)</sup>を書き写しているので、転記する。

### さゝやき 会員名 いろは順

伊藤一笑（先生 留吉）、石山哀鳥、支部沈黙、芳園、河合静波、横山涼菟、津川韻水、沖の石（井口フミ先生）、中川垂柳子、中居茶目、中居クローバー、村上白山、村上黙堂、村上鈴蘭、村上赤い花、大内青波、八島汀舟、八島紅愁、小松北鷗、小松北星、小坂櫻草、阿部海舟、あかん坊、佐藤双葉、笹谷常咲、三葉、T生、元山藻の花、沈丁花<sup>(31)</sup>

兵演習の時の如き厚田小學校生徒三十五名は教員に従ひ全地に旅行したるが村民有志者は其費用として直に三十余圓を寄附したり（以下略）」とある。

<sup>(27)</sup> 厚田村の榮譽村民の一人。漁業家として財をなし、厚田小学校や発足分教場を建設する際にも多額の寄付をした（『あつたの歩み』、石狩市厚田区、2006年、30-31頁）。同村の榮譽村民は、佐藤松太郎と作家の子母澤寛、戸田城聖、第43代横綱の吉葉山潤の輔、池田大作の5人である。

<sup>(28)</sup> 『囁き』1919（大正8）年2月号、29頁。

<sup>(29)</sup> 前掲「厚田今昔物語・6」『北海道教育評論』第22巻第4号、307頁。

<sup>(30)</sup> 支部家所蔵のメモ。支部松代が転記したのは、『囁き』1918（大正7）年7月号の会員名簿。

<sup>(31)</sup> 沈丁花は、加藤郁代（旧姓 大橋）である。1920（大正9）年に支部沈黙等が創刊した同人誌『路上』にも、1921（大正10）年から参加している。（「北海道文学展図録について一思いだすことども一」『支部沈黙作品集 下巻<散文篇>』北書房、1970年、19頁）。

上記以外にも以下の会員名が確認できる。戸田のように時期によってペンネームを変えている場合もある。

二葉、住谷治、小樽生、〇〇子、はるみ、札幌の人、大場悠鴻、大場茶目仙人、戸田櫻桃、八嶋浦人、土井土光、佐藤忘名草、中村砂人子、迷の花、小坂櫻草、草籠、藻乃花、月小夜、秋海棠、鳥味、汀舟、星花、白夜、ベン・ジョンソン、スイートピー

上記のなかでも、支部沈黙、伊藤一笑、垂柳子、悠鴻、北星の五人が投稿の常連である<sup>(32)</sup>。会員には、女性も含まれており、村外在住者の「小樽生」、「札幌の人」もいる。

4. 毎月の投稿締切日が毎月5日である。その月中旬<sup>(33)</sup>に謄写刷をして配布した。
5. 投稿種目は、散文・和歌・俳句・新詩と自由であり、一度に何種類も投稿してもよいが、一人あたりの投稿字数は、800字内外となっていた。しかし、決められた字数を大幅を超える作品もあった。戸田もその一人。
6. 『囁き』の本文頁数は、およそ32頁から54頁前後である。

#### c. 『囁き』の存続期間

加藤郁代が所蔵していた『囁き』は、第1号(1918〈大正7〉年2月)から第13号(1919〈大正8〉年3月)までである。1918(大正7)年12月号は休刊している<sup>(34)</sup>。

支部が日記に、「大正八年二月厚田を去る 同四月退職」<sup>(35)</sup>と書いているように、1919(大正8)年2月には療養の為に厚田の地を去り、4月には正式に厚田小学校を退職している。その後は、同僚である伊藤一笑<sup>(36)</sup>が引き継ぐことになる。彼は、1919(大正8)年2月号の「囁きらん」に、次のように書いている。

私は囁きの創刊から皆様の御世話になつて居るものです。この私は皆様に御知らせしなければならぬ事が出来ました。それは沈黙氏の轉地療養の事です。氏は長い間病氣で居られましたが遂に轉地のや

<sup>(32)</sup> 『囁き』1919(大正8)年1月号の「さゝやき欄」に、北星は「一笑様、沈黙様、垂柳子様、悠鴻様今迄第一号より一ぺんもかゝさずに出されたやうですが、此の後も最後まで戦ひませう。私もその一人です」と書いている。

<sup>(33)</sup> 発行日が明らかなのは、大正7年2月21日、3月10日、5月12日、7月13日、8月20日、9月13日である。

<sup>(34)</sup> 休刊の理由として考えられるのは、支部が病気により11月より休職したことである。前号の1918(大正7)年11月号の「編輯室から」には、「やまひが こんなに 発刊をおそくしました。」と3行だけ書かれている。

<sup>(35)</sup> 前掲『新日記 1957年』、379頁の「厚田を去ってから私が歩いたところ—大略—」。前掲「今日は三月二十八日『支部沈黙作品集 下巻<散文編>』、236頁には、大正8年3月28日は「病氣で札幌に居た時」とあり、3月28日には、すでに札幌に居る。

<sup>(36)</sup> 伊藤留吉「五十年のことども」『支部沈黙 人と作品』(江別市文化振興会 1969年)、66-68頁の中には、『囁き』について全く触れていない。

むなき事になりました。それで原稿は伊藤一笑宛に御送付願 [い] ます。

しかしながら、伊藤に引き継いだ後、第13号は発行されたが、第14号以降はおそらく発行されていないのではないだろうか。加藤郁代も、第13号（1919〈大正8〉年3月）までしか保存していない。

『囁き』第13号（1919〈大正8〉年3月）の「編輯室から」には、次のように書かれている。

今月号がおくれたのは、會員諸君が五日迄に送稿してくれないからです。

□

それで一部の人は廃刊しやうと云っておりますが、私等の出来得るかぎりやるつもりです。原稿と會費は月の五日迄かならず送る事です。今月は発刊が後れましたから、四月のメ切は四月の十五日に致します。

『囁き』の原稿と会費が思うように集まっていない様子が見て取れる。

また、本文頁数も1918（大正7）年10月号51頁、11月号52頁、1919（大正8）年1月号55頁に対して、1919（大正8）年2月号31頁、3月号27頁と少なくなっている。

1919（大正8）年1月の「さゝやき欄」に、常連の投稿者、北星による「匿名」批判が掲載されている。また、それに対する戸田甚一の反論が、2月号の「囁きらん」に掲載されている。この「匿名」批判は、戸田一個人に向けられたものではなく、ペンネームで投稿する同人誌『囁き』の在り方、それ自体に向けられたものである。支部沈黙の転地療養の発表の時期と重なり、この投稿は會員達に冷水を浴びせるような結果になったのではないだろうか。戸田は、3月号には投稿していない。

<北星<sup>(37)</sup>の「匿名」批判>

匿名なぜするんだらう、私にはわからない。匿名する位なら投書しない方がよからうと私は思ふ。文を書いて自分の名を出して人が笑ふんだらうか。恥しいから匿名[に]するんだらうか。笑ふ奴は笑へ。人は人。自分は自分。匿名の諸兄よその理由を囁きらんにも出して下さい。巻頭に『みだし』でも出して、後に會員諸兄の姓を出して下さい。名は変名でかまひませんから<sup>(38)</sup>。

<あかん坊（戸田甚一）の反論>

北星君、

匿名攻撃をやったね、君其の熱情、其の熱情を失ひ給ふな。僕はうれしく思ひますよ。

君の熱情を心からうれしく思ひますよ、元氣ですね、

<sup>(37)</sup> 加藤郁代旧蔵の『囁き』の書き込みによれば、北星は、[作家になった] 楠田匡介。（『囁き』1918（大正7）年2月号、11頁）。

<sup>(38)</sup> 『囁き』1919（大正8）年1月号の「さゝやき欄」。

自分も昔の過激な時代を思つて君の心中を御察して居ます。

しかし匿名の譯を言へなんてそんな野暮を言ひ給ふ<sup>xy</sup>忽れ

其の理由は君に任すが人によつてもつたい振、よい振、恥しかり生意氣振色々ある、僕はどれだかしらんがね、君の熱情君の攻撃振にうれしく公開する、厚田小学校の卒業生戸田甚——雅号あかん坊さ、しかし北星君故郷遠く雨に風に我が故山名物三吉山を忍び さゝやきをば唯一の慰安の友として又もの想の種として過しつゝある厚田人あるを知り給へ、 あかん坊<sup>(39)</sup>。

#### d. 支部沈黙の略年譜と人物像——詩人として、教師として——

支部沈黙は、小学校の教員としての生活も長いが、『北海道新聞』が1957（昭和32）年に連載した「新郷土読本 人物篇」の「詩人の巻」<sup>(40)</sup>で紹介されているように、生涯を教育者として、詩人として生きた人物である。支部が詩作を始めたのは、『囁き』創刊の頃からである。支部は、1946（昭和21）年7月25日の日記<sup>(41)</sup>に、「詩を作る前」として次のように書いている。

そのころまだ純粹に詩といふものを知らなかつた。師範の一二年生のころだから明治末期である。クラスのもので、誰であつたか、農場に行く草原にねころんで、藤村の詩集をよんでみた。が、わたしは、自分の世界とは殆んど縁のないもののやうに考へられた。しかし、もう青年期に入りかけて居たので、詩集にこそまだ手をふれなかつたけれども、詩的情緒は春霞に咲く櫻のやうにほのぼのと身内に立ちこめてみた。詩を書くことを知らなかつたが、マッチ一本でその春霞は発火しようとしてみたのかもしれない。

『囁き』を創刊した頃の支部は、「マッチ一本で発火する春霞」であつた。『囁き』の第1号から、支部は「沈黙」のペンネームを使っている<sup>(42)</sup>。

望月芳明は、支部が本格的な文学活動に入るのは、1920（大正9）年10月に、札幌の友人辻義一<sup>(43)</sup>と詩誌『路上』を創刊したころからと述べ、

この雑誌『路上』は北海道の近代詩、抒情詩の草分けの詩誌と言われ、また沈黙はここにおいて北海道における抒情詩人として注目される。

この『路上』において、後の沈黙と時の大詩人三木露風との師弟としての運命的出会いと交わりがもたれるのである<sup>(44)</sup>。

と紹介している。

<sup>(39)</sup> 『囁き』1919（大正8）年2月号の「囁きらん」。

<sup>(40)</sup> 「新郷土読本 212」、「同213」『北海道新聞』1957年10月1日、2日、各6面。

<sup>(41)</sup> 支部家所蔵

<sup>(42)</sup> 『囁き』第1号の「囁き會員名（イロハ順）」他による。

<sup>(43)</sup> 支部は、「辻義一君とは厚田時代大正五、六年頃より相識る。辻君は厚田出身だが、当時石狩の某校にいた」（前掲「北海道文学展図録について—思いだすことども—」『支部沈黙作品集 下巻〈散文篇〉』、18頁。辻義一（儀一）は、厚田小学校尋常科を1899（明治32）年に卒業した（『開校九十年記念誌』、厚田小学校、1967年、60頁）。

<sup>(44)</sup> 望月芳明「支部沈黙 透明な詩精神」『江別に生きる5 人間の詩』（江別市 1994年）、173—174頁。

また、北海道詩人協会の会長も務めた加藤愛夫は、『落日』の序文「北海道現代詩創成期の詩人」に、「その頃 [厚田小学校勤務時代]、北海道で現代詩を書いていた人を支部氏以外に私はまだ知らない」<sup>(45)</sup>と述べている。

次に、教師としての支部沈黙の信条を端的に表現した日記の一文を紹介したい。

### 先 生

教室だけの受持ではない。その子供たちが卒業して、大人になっても、先生でなければならない。子ども達が大人になった時に、おぼれていたらもう先生ではない。生徒も、ほんとうに生き、先生もほんとうに、日に日に生き続け、どちらもともに、天のはしごをのぼつてゆくのだ。

先生は時間的には、この世の空気を、さきに吸いはじめた。それだけ、人生の階段において、いつも一段上のところにいなければならない。この意味においては、死ぬまで、生徒の先生であるべきだ。それには、先生は一日一日を、真に生きていなければならない。なんかのあかりをかざしていなければならない。

—昭和29 8、8—<sup>(46)</sup>

支部は、この言葉通り、子どもたちの卒業後も詩や作文を通じて彼らとの交友を大切にしていた。戸田もそのひとりである。印象深い最初の教え子であった。2人の交友は、戸田が卒業した後も深く長く続いたので、支部は、戸田に対しては格別の思いをもっていた。

### <資料3> 支部沈黙の略年譜

『囁き』と戸田との交友を中心に支部の略年譜を掲載する<sup>(47)</sup>。支部は、1900年生まれの戸田より8歳年上である<sup>(48)</sup>。

西暦年(和暦) 月日	事 項
1892(明治25)年3月23日	宮城県志田郡松山村に生まれる
1906(明治39)年3月	宮城県志田郡松山高等小学校を卒業
秋	北海道音江村に移住した父と兄の下で、開墾作業を手伝う
1907(明治40)年秋	歌志内機関庫の火夫見習となる ブラジル行きを決心したが、父の不賛成で実現できなかった
1910(明治43)年4月	北海道師範学校に入学 在学中に北辰病院に入院

<sup>(45)</sup> 前掲『落日』、1-2頁。

<sup>(46)</sup> 支部沈黙『茂辺地在住日記 第1号 自昭和二一、五、二五 至昭和二二、九、一四(以下『茂辺地在住日記』と略す)』(江別市情報図書館所蔵)。

<sup>(47)</sup> 「支部履歴書」、前掲『丘のひまわり』、160-161頁の「略歴」および『支部沈黙 人と作品』(江別市文化振興会 1969年)の「支部沈黙年譜」等を参考に作成した。

<sup>(48)</sup> 戸田が尊敬し影響も受けていた兄・外吉は、1891(明治24)年10月6日生まれで、支部沈黙と同年である。外吉は師範学校入学を夢見ていたが、1908(明治41)年に肺結核のため亡くなった(戸田城聖『若き日の日記・獄中記』、青蛾書房、1970年、11頁)。支部沈黙は、戸田にとって外吉と重なる存在である。

1913（大正2）年7月	肋膜炎、大腸カタルのため、北海道師範学校を中退し、静養する <sup>(49)</sup>
10月3日	厚田尋常高等小学校の代用教員となる。11月15日より訓導。翌年3月まで高等科2年の戸田甚一を教える
1918（大正7）年2月21日	『囁き』を創刊。詩を書き始める <sup>(50)</sup>
11月	流行性感冒にかかり、以降休職
1919（大正8）年2月	転地療養の為、厚田村を離れる
4月10日	厚田尋常高等小学校を退職 半年間本州各地を旅して歩く
10月10日	戸田のすすめで <sup>(51)</sup> 夕張郡沼の沢尋常高等小学校の代用教員となる <sup>(52)</sup>
1920（大正9）年3月上旬	上京する戸田を見送る
3月30日	空知郡沼南尋常高等小学校の代用教員に転任
10月	辻義一と詩誌『路上』を創刊し、本格的な文学活動を始める
1939（昭和14）年3月25日	旭川市立大成尋常高等小学校を退職して満洲に渡る
1946（昭和21）年3月	終戦により江別町に引揚げる。役場等に勤務
1950（昭和25）年10月31日	江別町立小学校の教諭となる
1957（昭和32）年5月13日	戸田城聖（甚一）と再会
1957（昭和32）年6月	38年ぶりに厚田村を訪問
1958（昭和33）年4月上旬	戸田城聖の逝去の報に接する
1958（昭和33）年10月15日	江別小学校を退職
1969（昭和44）年3月21日	病没（76才）

### 3. 『囁き』と戸田甚一

#### a. 戸田甚一の『囁き』への関わり

支部は、戸田の『囁き』への関わりについて、「このことは戸田君にもしらせてあったものとみて、この“囁き”誌に数回掲載されている<sup>(53)</sup>と述べている。戸田は、1918（大正7）年4月の厚田帰省の折に『囁き』の会費を払っている。彼の「金銭出納帳」には、「4月29日 囁き会費 12（銭）」<sup>(54)</sup>とある。戸田の最初の投稿は「寂しき厚田」で、1918（大正7）年5月号に掲載された<sup>(55)</sup>。「囁きらん」に、「さゝやきをば唯一の慰安の友として」<sup>(56)</sup>と書いているが、故郷厚田

<sup>(49)</sup> 「北海道師範学校令第何条により退学を命ず」この退学辞令を渡されたときには、絶体絶命、全く困った。行く家がない。寄宿舎に居たればこそ麦飯を食って、命をつないでいた自分は、その日から食物と住居とを一度に奪われたことになる（前掲「十月三日」『支部沈黙著作集 下巻<散文篇>』、224頁）。

<sup>(50)</sup> 『茂辺地在住日記』には、「大正七年頃、謄写版の“囁き”を創刊、詩のようなものを、発表し始める」とある。『囁き』は、支部沈黙にとって初めて創刊した文芸誌である。

<sup>(51)</sup> 前掲「新郷土読本 212」には、「夕張で代用教員となっていた教え子の戸田城聖のすすめで、真谷地の沼ノ沢小学校につとめた」とある。

<sup>(52)</sup> 前掲「支部履歴書」による。

<sup>(53)</sup> 前掲「厚田今昔物語・6」『北海道教育評論』第22巻第4号、307頁。

<sup>(54)</sup> 1918（大正7）年4月の「金銭出納帳」。

<sup>(55)</sup> 前掲『丘のひまわり』、104頁。

村を離れている戸田は、10カ月間に20の作品を投稿している。

1918（大正7）年、戸田は正訓導試験を2度受験している。最初に受けた8月は不合格<sup>(57)</sup>、10月に再度受験して合格した。そのためか、1918（大正7）年10月号の『囁き』に投稿した作品はない。

b. ペンネーム—「櫻桃」と「あかん坊」—

戸田は、「櫻桃」のペンネームで2つの作品を、「あかん坊」のペンネームで18の作品を『囁き』に投稿している（資料8参照）。

「櫻桃」が戸田のペンネームであることは、1917（大正6）年2月22日の日記<sup>(58)</sup>で明らかである。この時より、「櫻桃」を使っているが、その後次のように改名を重ねている。

「晴通」 1917（大正6）年11月20日に姓名判断で改名<sup>(59)</sup>

「雅晴」 1918（大正7）年5月3日に改名<sup>(60)</sup>

「城外」 1919（大正8）年1月3日以前に改名<sup>(61)</sup>

「櫻桃」のペンネームで書いた「寂しき厚田」は、1918（大正7）年5月号に掲載された。1918（大正7）年4月27日に厚田に帰省し、『囁き』の存在を知り会費を納めた<sup>(62)</sup>戸田は、締切の5月5日までに原稿を送ったのであろう。

また、「あかん坊」が戸田であることは、1919（大正8）年2月号の「囁きらん」で、実名とペンネーム「あかん坊」を明かしている<sup>(63)</sup>。「あかん坊」というペンネームの由来については、後で述べる。

<資料4> 『囁き』投稿前後を中心とした戸田甚一の略年譜

『囁き』投稿前後を中心に戸田の略年譜を掲載する。

西暦年（和暦）月日	事 項
1900（明治33）年2月11日	石川県江沼郡塩谷村に生まれる
1902（明治35）年	一家で北海道厚田郡厚田村に移住
1906（明治39）年4月 <sup>(64)</sup>	厚田尋常高等小学校尋常科入学

<sup>(56)</sup> 『囁き』1918（大正8）年2月号の「囁きらん」。

<sup>(57)</sup> 水滸会記録による。

<sup>(58)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、15頁。

<sup>(59)</sup> 同上、43頁。

<sup>(60)</sup> 同上、72頁。

<sup>(61)</sup> 同上、83頁。

<sup>(62)</sup> 1918（大正7）年5月号の「編輯室から」に新会員として「戸田氏……櫻桃」が紹介されている。会員は21名となった。

<sup>(63)</sup> 1919（大正8）年2月号の「囁きらん」。

<sup>(64)</sup> 1907（明治40）年の「小学校令」改正（翌年施行）により、従来の尋常科4年高等科4年が、尋常科6

1912 (明治45) 年4月	厚田尋常高等小学校高等科入学。級長に推薦される
1913 (大正2) 年10月3日	支部沈黙が厚田尋常高等小学校に奉職し、戸田の担任となる
1914 (大正3) 年3月	厚田尋常高等小学校高等科を首席で卒業
1915 (大正4) 年7月7日	札幌の小六商店に5年間の年季奉公で入社
1916 (大正5) 年2月2日	親友森田正吉が上京する。戸田は6月5日まで脚気のため休職
1917 (大正6) 年3月	小六商店を退社し、実家に戻る
5月	準教員検定試験の筆答試験を受験。
5月25日	小六商店に再入社
6月20日	準教員検定試験の筆答試験に合格する <sup>(65)</sup>
9月25日	病気で北辰病院に入院
10月24日	北辰病院を退院し、復職。しかし、病後の回復が進まず再度休職
11月17日	仙場病院に入院 (翌年1月24日退院)
1918 (大正7) 年2月21日	『囁き』が創刊される
4月21日	小六商店を退社
5月3日	夕張町に住む長姉村上ツネ <sup>(66)</sup> を訪問
6月13日	夕張町の石狩炭砒若鍋第二坑販売所の事務員となる
6月25日	夕張町 <sup>(67)</sup> の真谷地尋常小学校に准訓導として採用される
12月24日	尋常小学校本科正訓導の資格を取得 <sup>(68)</sup>
1919 (大正8) 年2月13日	真谷地尋常小学校の訓導となる
4月	真谷地尋常小学校の筆頭訓導となる
5月	上京する親友川瀬蒼天 (宏親) に、必ず追って上京することを約束
1920 (大正9) 年1月	上京し、西町尋常小学校校長、牧口常三郎と面会。後日、同校の三カ月間の臨時代用教員に採用される
3月上旬	夕張に戻り、支部沈黙に別れを告げ、再度上京する
3月30日	真谷地小学校を退職 <sup>(69)</sup>

年高等科2年に変更された。戸田は、1912 (明治45) 年に尋常科を卒業し、1914 (大正3) 年に高等科第2学年を卒業している (前掲『開校九十周年誌』、73・138頁)。戸田は同令改正の適用者と考えられるので、尋常科入学を1906 (明治39) 年とした。

<sup>(65)</sup> 『北海タイムス』1917 (大正6) 年6月20日、2面、「教員試験合格者」の「尋常小學校準教員」の最初に、戸田甚一の名前がある。戸田甚一自筆履歴書 (以下「戸田履歴書」と略す) (夕張市教育委員会所蔵) には、「大正六年六月廿日 尋常小學校准教員タルコトヲ免許ス 北海道廳」とあり、この日が合格の日となっている。

<sup>(66)</sup> 後年、戸田は世話になった村上嘉一郎夫妻を東京に呼びよせ、日本小学館印刷部を任せている。『新教』もそこで印刷されている。

<sup>(67)</sup> 開村以来、登川村と呼称されていたが、1918 (大正7) 年2月11日に夕張町となった (『夕張市史』、夕張市役所、1959年、59頁)。

<sup>(68)</sup> 『北海タイムス』1918 (大正7) 年12月24日、2面、「検定實地試験合格」10名の中に、戸田甚一の名前がある。

<sup>(69)</sup> 前掲「戸田履歴書」及び『真谷地小学校職員録』(武内孝利他『調査 牧口初代会長、戸田第二代会長 札幌中央区での記録』に収録) による。「戸田履歴書」には、退職理由が、小学校令施行規則第126条第2項後段の「自己ノ便宜ニ因リ退職ヲ出願シタルトキ [依願退職]」となっている。

#### 4. 支部と戸田の交友

##### a. 支部沈黙『丘のひまわり』から

支部は、戸田との交友について数多く書き残している（資料7参照）。随筆誌『紅』に書いた「厚田の人々」<sup>(70)</sup>の中では、

わたしが先生というものになつて、はじめて受持たされた生徒の中に戸田君<高等二年生>がいる。もつとも、ほんのちよつとではあるがわすれることができない。むしろ厚田の学校を卒業してから後の関係が深い。

と書いている。戸田との交友については、1958（昭和33）年9月に出版された支部沈黙編『丘のひまわり』に要約して書かれている。同書は、戸田が逝去した年に出版された。この中には、支部のかつての教え子達の作品が「出蘭集」としてまとめられているが、その最初に戸田の「寂しき厚田」を掲載している。このあとに支部は、次のように書き添えている<sup>(71)</sup>。

私のはじめて、厚田にアンチャン先生で赴任したのは、大正二年十月三日である。ほんのちよつとではあるが、いきなり受持たせられたのが、高等一、二年の複式で、その高等二年に、戸田君が居つた。眼がほそく、強度の近眼だつたと思うが、よく出来た。級長だつた。卒業してから、札幌の文房具店に、二、三年奉公した。おみやげに、はじめて万年筆というものを、私に使わしてくれたのも戸田君である。准教員の受験手続をきまにきたのは、十九の春であつたと思う。頭がいいからそれも、その上の尋正の検定も一、二年のうちにパスした。夕張では、戸田君は、真谷地、私は沼の沢の小学校に教員[を]していた。それに、妹さんも、私の学校に一緒だつたので、何か時々背負つてきてくれたりした。去年の五月、創価学会長として、華々しく札幌にのりこんできた時には、大正九年三月一別以来の面談で、大いに御馳走になつた。立志伝中の人で、全く惜しいことをした。戸田君のことについては、もつともつと書いておこうと思う。

「もつともつと書いておこうと思う」という言葉通り、1968（昭和43）年から『北海道教育評論』に連載した「厚田今昔物語」<sup>(72)</sup>に、戸田との思い出をこと細かに書いている。また、その中で、戸田の「寂しき厚田」のほぼ全文を掲載している。

##### b. 厚田小学校での二人の出会い—最初の児童と最後の教師—

支部と戸田との出会いは、1913（大正2）年10月3日に支部が厚田小学校へ「アンチャン（お兄さん）先生」として赴任した時である。北海道師範学校を中退して厚田小学校に赴任した支部は22歳であり、戸田とは8歳しか違わない。「ほんのちよつと」と支部が言うようにクラスを受け持ったのはわずかに半年である。その最初のクラスの級長が戸田甚一であった。

支部沈黙にとって戸田甚一は、教師として関わりを持った最初の児童のひとりであり、就職す

(70) 支部沈黙「厚田の人々」『紅』第11号（紫紅会 1958年）、17頁。

(71) 前掲『丘のひまわり』、104-108頁。

(72) 『北海道教育評論』（北海道教育評論社 1968年10月号～1969年4月号）に6回連載。

ることが決まっていた戸田甚一にとっては、最後の教師が支部沈黙であった。

支部は、赴任した時のことを次のように書いている。

わたしが、厚田に、はじめてアンチャン先生として行くことになったのが、大正二年十月三日 石狩からは歩くことになる。(中略)いきなり受持たせられたのが絵のうまい先生<sup>(73)</sup>のあとであった。その先生は、土地の金貸しの娘さんと結婚したらしいが、間もなく、ひとりて東京に出てしまった。一時、その穴埋めに、わたしがその組を持たせられたのである。高等一、二年の複式である。先生と生徒との<sup>(74)</sup>巨離は年にしてもあまり遠くない。金田という斜視の生徒がいた。算術の立方体の時だつたと思うが、彼等に大根を持つてくるようにいつたら、次の日、金田は、ふとい秋大根を二三本ぬいてきて、教壇の上へのせた。

戸田君は、この組の二年生で、竹のように丈が高かつた。頭のいいところに、口もよくきいた。眼が象のようにほそくて、あのころから眼鏡をかけておつたかも知れない。こんど逢つたとき(注：1957年)殊にそう思つたのだが、あのほそいところが、却つて、うすきみわるいほど、時代を見ぬいたり、人の心の奥底に注射したりすることになりはしないか。学藝会るとき、何か物理の実験を二人にさせたような気がする。物は熱によつて変化する。どちらが金の環であつたか、球であつたかは忘れた。それも寸劇的に、やつて観衆の気をひくようにしたものである。

彼は卒業してから、札幌の文房具店(南一条通り<sup>(74)</sup> 現存)に奉<sup>(75)</sup>行した<sup>(76)</sup>。

肋膜炎と急性大腸カタルを患つたため、師範学校から退学を命じられた支部であつたが、望月によれば、「ここ厚田で戸田<sup>(77)</sup>聖城はじめ他の生徒にもわけへだてなくよく面倒を見た。下宿の一室にランプの灯がともると、在宅を確かめた生徒たちが毎晩のように押しかけた。沈黙はそれをいやがらず生徒たちを歓迎し果物や菓子を馳走した。給料が十六円で下宿代が八円、残りの金は本代はもちろんだが、このように毎日やってくる生徒たちの菓子や果物代として使われ、それもなくなくなると砂糖湯で子供たちを接待した<sup>(76)</sup>」といった生活であつた。

また、この頃の沈黙について、「ニーチェの哲学に傾倒し、『ツアラトストラ』と首つたけとなつたが、一方日本では徳富蘆花の『自然と人生』(明治33年刊)、『みみずのたわごと』(大正2年

<sup>(73)</sup> 北師出の荒川先生のこと(前掲『支部沈黙著作集 下巻<散文編>』、226頁)とある。荒川とは、北海道師範学校を1908(明治41)年に卒業した荒川秀士である(『同窓会名簿』、北師同窓会、1943年、22頁)。支部沈黙は河合裸石の退職後に赴任したが、河合の後任とする前掲『若き戸田城聖(二)』、8頁の記述は誤りである。戸田の日記『奮闘』に、小学校時代の恩師の名前が、「今井ケン先生、須藤八十治(弥惣治)先生、川合七郎先生、荒川秀士先生、笹谷常咲先生、支部貞助先生、中村恒男先生、今金吾先生」と列記されている。中村恒男は、校長。河合裸石の名前はない。戸田甚一と河合裸石との交友を示す資料は見つからない。( )内は、前掲『みよし』による。

<sup>(74)</sup> 小六商店合資会社。化粧品、荒物の卸商。札幌市南1条西2丁目。1929(昭和2)年の周辺の商店街の地図では、「小六洋物問屋」と表示されている(札幌市教育委員会編『札幌の街並』、北海道新聞社、1977年、32頁折込地図)。また、昭和初期の小六商店の写真には「洋品小問物、化粧品雑貨 小六卸問屋」という同店の看板が写っている(武内孝利他『調査 牧口初代会長、戸田第二代会長 札幌中央区での記録』に収録)。

<sup>(75)</sup> 『新日記 1957年』、350—354頁。

<sup>(76)</sup> 前掲『江別に生きる5 人間の詩』、168—169頁。

刊)にも傾倒していた。沈黙は人間の実存にかかわる文学的、哲学的根本命題に悩む孤独な精神と、その希求における哲学的日常の中に己を置き、生徒たちの帰った後は夜更けまで、自然や人生に対する哲学的思索や随想、そして詩を書いたのである<sup>(77)</sup>と紹介している。

戸田は、成績はよかったが<sup>(78)</sup>、家庭の事情で進学は断念しなければならなかった。支部と戸田は年齢がさほど離れていないこともあり、戸田は授業が終わると支部の部屋に押しかけた<sup>(79)</sup>。この訪問は、卒業の翌年の1915(大正4)年7月、就職する戸田が厚田を発つまで続いた。

2つのエピソード「おみやげに、はじめて万年筆というものを、私に使わしてくれたのも戸田君である」、「准教員の受験手続きをききにきたのは、十九の春であつたと思う」について、支部はより詳しく書いている。

ところで、わたしにすれば、おもしろい日記の断片が、手元にあるので、写してみる。

大正六年三月二十八日

(中略)

戸田が准教員の試験を受けるとて、手続きを学校にききにきた。この受験手続きは戸田君が④をやめて来てのことか、どうかわからない。これより前になると思うが、或る正月に、戸田君が家に帰ったときのこと、④<sup>(80)</sup>の宿を訪ねてきた。「先生、お土産です。」といて、万年筆を出した。滅多に持っていない頃で、私は戸田君にもらった、この万年筆がはじめてであつた。<sup>(81)</sup>

戸田が、厚田小学校を訪問した時には④(小六商店のこと)を辞めて厚田に戻っている。この時は、中村恒男校長を訪ね、支部とは話をしていない。校長は、准教員受験に反対し商人の道に徹するように諭した<sup>(82)</sup>。しかし、1917(大正6)年5月に戸田は尋常科准訓導の検定試験を受験し<sup>(83)</sup>、6月20日に合格している。

次に、「或る正月」とは、いつのことか。1915(大正4)年7月に小六商店に入社した戸田が1917(大正6)年3月(日記の断片を書いた日)までに帰省できる正月は、1916(大正5)年と、1917(大正6)年であるが、前者である<sup>(84)</sup>。戸田は、創作に打ち込む支部にとって何が必要かよく理解していた。支部は万年筆を初めてもらったと心から喜んでいる。月々の給金が出ないという

<sup>(77)</sup> 同上、169頁。

<sup>(78)</sup> 戸田は、水滸会で、「図画と書方が丙で、あとは全部甲だった」と語っている。

<sup>(79)</sup> 前掲『若き戸田城聖(二)』、7-29頁。池田大作『人間革命』第12巻(聖教新聞社 1993年)、38頁では、戸田が支部からよく本を貸してもらったエピソードを紹介している。

<sup>(80)</sup> 「マルウロコ」と読む。

<sup>(81)</sup> 前掲『新日記 1957年』、355-358頁。

<sup>(82)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、17-18頁。

<sup>(83)</sup> 小六商店で働いている頃について、戸田は「卒業後、小僧奉公をした。勉強したいと思って、二宮尊徳のように、仕事をしながら勉強した。朝は六時から七時まで勉強した。昼は働かれ、夜も七時から十時まで働いた。そして、十時から十一時まで、また勉強した」と語っている(水滸会記録による)。

<sup>(84)</sup> 支部の日記(大正5年3月28日)に、「万年筆をいぢくってる中で九時も過ぎてしまった」(前掲『支部沈黙著作集 下巻<散文篇>』、234頁)とあるが、これは戸田が贈った万年筆と推察できる(長島前掲論文、49頁)。

年季奉公の戸田が高価な万年筆<sup>(85)</sup>をお土産としたのは、支部に対する格別の感謝があったからである。また、支部は、戸田は文房具店に奉公したと思込んでいる（79頁と80頁の引用下線部分）が、小六商店では万年筆は取り扱っていないと思われる。支部を心配させないために、戸田はそのように言ったのだろう。また、戸田は1918（大正7）年4月23日の帰省の時も、支部にお土産として葡萄酒を用意している<sup>(86)</sup>。

### c. 戸田甚一の『囁き』への投稿に見られる支部沈黙

戸田にとって同人誌『囁き』への投稿はきわめて新鮮な経験であったが、その後抒情詩人として開花していく支部にとっても、文芸作品を発表する初めての場であった。「寂しき厚田」では、会いたい人間として教師では支部（沈黙）、同級生では、村上（方太郎）をあげている。作品2「顔知らぬ友の病めるを聞きて」は、支部の病状を深く心配して書いたと思われる（本稿96頁）。

発見された『囁き』は、1918（大正7）年2月から1919（大正8）年3月迄のものであるが、1918（大正7）年5月号に掲載された作品1「寂しき厚田」と作品19の和歌以外は、夕張における創作である。しかし、夕張に住んでいるとわかる作品はない。

### d. 支部沈黙に沼の沢小学校の職を紹介した戸田甚一

支部沈黙は、1919（大正8）年4月10日に厚田小学校を病気のため退職する。その彼が半年後の10月10日には、戸田が勤める真谷地小学校に近い沼の沢尋常高等小学校（以下「沼の沢小学校」と略す）に就職する。支部は、この経緯について次のように書いている。

戸田君は、ちよつとの間に、もうひとつ上の資格をとつて、夕張の真谷地に奉職していたし、妹のテル子さんも、いつのまにか、准教員になつて沼の沢に居つた。わたしは三つの渦巻<sup>(87)</sup>にまきこまれて死にかけ、内地を流浪した揚句に、また北海道にもどつてきた。札幌の友人の家の片隅に、ころがり込んだものからでは悪いし、仕事はなしの苦境にたちいたつたのである。そのとき、どうして便りをするようになったか覚えがないが、結論としては、夕張の方に口があるからと知らせてくれたのが、戸田君であつたと思う。とにかくそんなわけで、わたしは、ほんの三ヶ月位の間であるが、テル子さんのい

<sup>(85)</sup> 万年筆が日本で本格的に製造販売されたのは、戸田が札幌で働き始める前年の1914（大正3）年頃のことと、銀座の伊東屋が国産万年筆「ロメオ（ROMEO）」を製造販売している。伊東屋に続いて国産万年筆を発売したのが、並木製作所（後のパイロット）といわれ、1918（大正7）年に発売している。1919（大正8）年には中屋製作所（後のプラチナ）が設立されている。当時、万年筆は作家の間で愛用されるなど、一般にはまだまだ珍しい文房具であった（長島前掲論文、10頁、49頁）。

<sup>(86)</sup> 1918（大正7）年4月の「金銭出納帳」には、「4月23日 葡萄酒 支部先生へ土産 80銭」とある。

<sup>(87)</sup> 三月二十八日は、支部沈黙の誕生日である。各年のその日の日記に註をつけたのが、「今日は三月二十八日」（『支部沈黙作品集 下巻＜散文編＞』、北書房、1970年）である。236頁の支部が厚田小学校を退職する直前の大正八年三月二十八日（28歳）には、「註・・・白い頁となつてゐる。病氣で札幌に居た時である。私のもつともなやんでゐた時である。〇と、金と、病氣とでなやんでゐた時である。私と彼との関係をまだあなたに打ちあげなかつた時である。その頃私は石山君と間借りをしていた」とある。三つの渦巻きとは、このことか。支部は、人間関係でも深く悩んでいたようである。

た学校に、今、考えると、全くピリピリした異状な神経で就職した<sup>(88)</sup>。

戸田は、病気で退職し苦境にあった支部と連絡を取り、隣の沼の沢小学校を紹介した。同校でも教員が不足していた<sup>(89)</sup>という事情もあったろうが、支部が師範学校を中退し、厚田小学校も退職した理由は問い合わせをすればすぐわかる。支部の就職には、戸田の人知れない尽力があったと思われる。支部は、続けて書いている。

戸田君が早速、何か脊負ってきてくれたりした。わたしは、この間までも、それが、つぶしむぎの袋のように思っていたのであったが。(中略)「あの時、しよつてきてくれたのは、麦であつたかね。」「いや、麦であるもんか。たきものだよ。」「汽車に乗つてきたわけかね。」「汽車なんかあるもんか。俺がしよつて歩いたんだよ。」<sup>(90)</sup>

支部が夕張に来たのは10月、内陸部の夕張は厳寒の季節に入っていく。病身の支部の健康を気遣った戸田は、汽車に乗ったのかと聞かれるほどの距離を薪(たきもの)を背負って支部のもとに届けた。

支部沈黙が沼の沢尋常高等小学校に採用された1919(大正8)年10月、同校の教員は支部を含めても4人である(資料5)。戸田テルは、戸田甚一の妹であり、堀は、北海道師範学校の一年後輩にあたる<sup>(91)</sup>。支部は、翌1920(大正9)年3月27日までわずか5カ月間勤めたあと、沼南小学校に転勤する。偶然かもしれないが、戸田甚一の上京の時期と重なっている。「今、考えると、全くピリピリした異状な神経で就職した」とあるが、心の悩みを引きずっていたのか、もしくは、肌に合わない人間関係がそこにあつたのであろうか。

<sup>(88)</sup> 前掲『新日記 1957年』、359-360頁。

<sup>(89)</sup> 明治末における道内の市町村歳出の50%は小学校で占められ、未曾有の凶作の翌[大正]三年には、給料支払困難な町村の教員数が、全教員の37%に達した。(中略)教員の生活苦から離職者があとを絶たず、道庁は教員不足に苦慮して補充を代用教員に依存して安上がりに雇った。現実には代用教員をみつけることすら十分にはいかなかった。大正6年の教員資格構成を見ると、有資格者64%、代用教員36%の割合であるうえ、学級数に対する教員定員は極めて低かった(山崎長吉『北海道教育史』、北海道新聞社、1977年、224頁)。

<sup>(90)</sup> 同上、360-361頁。

<sup>(91)</sup> 支部沈黙と札幌師範学校同期の石附忠平は、「北海道師範在学中、君は秀才であり、級長であった。それが二年の頃か、ふっと、学校から居なくなった。それは級友たちにとっては、風穴があいたような淋しさであった」(石附忠平「若い時からの友として」『支部沈黙 人と作品』、江別市文化振興会、1969年、63頁)と書いている。

<資料5> 沼の沢尋常高等小学校の1919（大正8）年10月現在の教員<sup>(92)</sup>

No	職名	氏名	就任年月日	在籍期間	備考
1	校長・訓導	佐々木久五郎	大正7年4月19日	3年	明治43年3月北師卒
2	訓導	堀 規矩男	大正6年10月18日	4年1カ月	大正4年3月北師卒
3	代用→准訓	戸田 テル	大正7年10月31日	2年	
4	代用教員 <sup>(93)</sup>	支部 貞助	大正8年10月15日 <sup>(94)</sup>	5カ月	大正2年北師中退

\*北師は、北海道師範学校の略

この時、戸田甚一は、若くして近くの真谷地小学校の正訓導、筆頭訓導となっていた。真谷地小学校には高等科がなく、高等科へ進む児童は沼の沢小学校へ行くことになる。また、距離的にも近い両校は交流があった。この沼の沢小学校で、一日だけ戸田先生の授業を受けた田中隆志（1926年3月同校高等科卒業）<sup>(95)</sup>が、その思い出を語っている。これは、子息田中紀昭が父隆志から聞いた内容をまとめたものである。

田中隆志。私の父である。明治44年、三人兄弟の三男として夕張市沼の沢で生れ、地元の沼の沢小学校を卒業した。（中略）父が小学校2、3年生の頃である。父の小学校には戸田先生のお姉さん<sup>(96)</sup>も教員として勤務しており、ある日、校長先生が、朝礼の際、「戸田先生の<sup>(97)</sup>弟さんが真谷地小学校で先生をしている。近くこちらへくる用事があるので、一日授業を見てもらうことにした。まだ若いけどすごい先生だ。しっかり授業を受けなさい」と挨拶された。以下、父が思い出したという授業の内容の一端である。

『戸田先生は、子供達に「汽車は何故走るのか」と質問したところ、父は「ヤカンのふたです。」と答えた。他の子供達が笑い出したが、先生は、「何故笑うんだ。田中のいうとおりである。」と言って、蒸気による沸騰する力で蒸気機関車が走るという説明をした。そして、雨などの水が水蒸気となって上空に昇っていくことや、天体など宇宙のことや自然界のことなど様々な話をされた。沼の沢は真谷地より田舎だったらしく、最期に先生は沼の沢の子供達に「沼の沢の大自然のようにのびのびと育てほしい」と話されたそうである。』

父は子供心にも先生の話を聞いて心が豊かになったような気がしたそうである。

この授業が行われたのは、戸田が上京する前年、1919（大正8）年ではないだろうか。

<sup>(92)</sup> 『蛍雪七十年 回顧』（夕張市立沼の沢小学校開校70周年記念事業協賛会、1976年、17頁）による。職名は、『北海道教育関係職員録 大正7年10月調査』（北海道聯合教育会 1918年）、備考は、『会報』第13号（北師同窓会、1923年）を参考に作成した。

<sup>(93)</sup> 前掲、「支部履歴書」による。

<sup>(94)</sup> 『沼の沢』（夕張市立沼の沢小学校閉校記念事業協賛会 1985年）、5頁では、支部貞助の就任日が大正8年5月5日となっているが、これは誤植と考えた。

<sup>(95)</sup> 田中隆志は、尋常科を1924（大正13）年3月に卒業。1907（明治40）年以降は、尋常科6年、高等科2年となる。

<sup>(96)</sup> 妹の誤り。

e. 戸田甚一の上京と支部沈黙

支部沈黙は、戸田の上京について、戸田と別れたのが3月であることと、上京の際に学校にどのような方法で伝えたかについて述べている。これは、戸田の上京の時期について諸説ある中で重要な証言と考える。

① 去年の五月、創価学会長として、華々しく札幌にのりこんできた時には、大正九年三月一別以来の面談で、大いに御馳走になった<sup>(97)</sup>。

② 大正九年三月、夕張でわかれてから、四十年にも近い時間的<sup>(マツ)</sup>巨<sup>(マツ)</sup>離のあとに<sup>(98)</sup>

③ あれは大正何年であつたか、石狩の町長が、南洋視察に出かけることになつたので、自分も連れて行ってもらいたいと急に思い立つて、なんでも土曜日の授業がすむと、すつ脛<sup>ツツ</sup>に草鞋がけで、汗だくになって波うち際を急いだことがあつた。ロクマクがまだ充分によくなつていないので、相当息苦しくなつてきて、果して、この身体では、南洋まで行けるかしらと心配しながらも、その時、うまいあんばいに町長との話合いが、つけば、そのままでも、とび出しかねないという、今考えると、全く乱暴な、話である。あのころの先生には、こんなはまんざらなわけでもなかつた。

笹谷常咲氏(北師二年先輩)にしたつて、その手で厚田をとび出した。夕張では、戸田城聖もその手で、東京へ出たことを、最近札幌で会つたとき、彼の口からきいた。どちらも、たぶん教室の黒板にかきおきをした位であろう。辞表なんかは、本人が東京に着いてからでも出したのでなからうか。これは自分の想像も、もちろん入れての話だ<sup>(99)</sup>。

戸田の最初の上京の時期については、戸田より少し前に西町尋常小学校に採用された窪田正隆の証言<sup>(100)</sup>と窪田が鹿児島県に住む弟敏夫に宛てた手紙の文面<sup>(101)</sup>によって明らかになっている。また、戸田は、「最初は先生の膝下に拾われた時の事である。いよいよ食えなくなつて先生の許へ」<sup>(102)</sup>と書いているので上京してから日にちが経過したあとに牧口に会っている。つまり、戸田は1月に上京し、2月2日以前に牧口常三郎に会い、その後、牧口が校長を務める西町尋常小

<sup>(97)</sup> 前掲『丘のひまわり』、107-108頁。

<sup>(98)</sup> 前掲『新日記 1957年』、320頁。

<sup>(99)</sup> 同上、10-13頁。

<sup>(100)</sup> 「三代の会長に巡り会った福運」『牧口常三郎先生の思い出』(聖教新聞社九州編集総局 1976年)、7頁に、窪田が牧口常三郎の面接を受けた日に戸田甚一に引き合わされたことと書いている。時期は書かれていない。牧口の面接を受けた時期については、美坂房洋編『牧口常三郎』(聖教新聞社 1972年)の本文74-75頁では、窪田正隆が牧口の面接を受けたのが「一月下旬」となっているが、同書443頁の窪田の手記では、「二月初め」となっており、一書の中で整合性がとれていない。窪田「牧口先生と私」『灯台』1971年3月号、第三文明社、61頁)、窪田「思索し、思想を大事にせよ」『大白蓮華』1976年6月号、聖教新聞社、25頁)の2つの手記は、「二月初め」としている。窪田の記憶は「二月初め」で一貫している。

<sup>(101)</sup> 窪田正隆は、2月2日から牧口のもとで働いていると弟に伝えている(拙稿「牧口常三郎新資料紹介(1)」『創価教育研究』第2号、創価教育研究所、2003年、252頁の脚注3)。

<sup>(102)</sup> 妙悟空「人間革命 37」『聖教新聞』1952年4月20日、1面。

学校の3カ月の臨時代用教員として採用されたのである<sup>(103)</sup>。

しかし、従来の伝記・年譜<sup>(104)</sup>では、1920（大正9）年4月1日の戸田の日記に「出京ここに一月一月の光陰は人生」<sup>(105)</sup>とあることから、戸田が初めて牧口に会ったのが3月頃ではないかとされてきた。しかし、支部の①、②の証言により、上京後一度夕張に戻り、支部らと会ったあと、3月初旬<sup>(106)</sup>に再度上京したことが立証された。

それは、窪田が、「それから三月の末になって、三笠小学校に転任なさるといので、それを聞いた戸田城聖先生ははじめ十数人の職員が、薄ら寒い三月の雨の夜、徹夜で先生の留任運動に狂奔したことも忘れられないことの一つである」<sup>(107)</sup>と書いていることや、戸田も「自分も末席の教員でありながら、この運動の参加を許され必死の擁護運動をしたも[の]であつた。雨のドシャ降りの中、この運動のために先生の宅を訪ずれてビショぬれになつた事もある」<sup>(108)</sup>と書いていることから三月末には西町小学校にいたことは明らかである。

次に「上京の際に学校にどのように伝えたか」であるが、支部は、1957（昭和32）年5月に戸田と再会した時のことはかなり詳細に書いているが、このことについてはふれていない。阿吽の話であつたのであろう。③の表現から推測すると、戸田の上京は十分な計画と確かな成算をもつて行われたものではなかつたと思われる。

それでは、計画的でなかつたとしても、戸田はなぜ思い切って教職を捨ててまで上京しようとしたのか。それは、以下の上京後の彼の行動と日記の記述によってある程度は推測できる。

第一に、日本力行会会長代理であつた木下乙市を訪問し、半日話をしている<sup>(109)</sup>。力行会は、海外移住を考える青年の教育を行っている団体である。この頃の戸田は、海外渡航も考えていた。「私は東京へ来てすぐ力行会へ入った。力行会は、外国へ行く人のためにキリスト教中心の教育

<sup>(103)</sup> 同上には、「下谷西町小学校の臨時代用教員としてそれから間もなく採用された。これがただ三月の契約で入った」とある。『閉校記念誌 西町98年の歩み』（台東区西町小学校 1997年）、48頁の「旧職員一覧」に、戸田の名前はない。

<sup>(104)</sup> 前掲『牧口常三郎』、75頁。同書、505頁の年譜では、「三月（一月説もある）、北海道より上京した戸田城聖を西町小学校の臨時代用教員に採用する」とある。牧口と戸田の出会いの時期について、前掲『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』は、「春頃」とし、『偉大なる「師弟」の道 戸田城聖』（潮出版社 2000年）、2頁では、「4月はじめ」、同書年譜では、「4月」とした。前掲『創価学会三代会長年譜 上巻』では、「一月中旬」としている。

<sup>(105)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、85頁。

<sup>(106)</sup> 窪田正隆「戸田城聖先生を悼む」（『聖教新聞』1958年4月25日、8面）に、「戸田先生と名もない私との関係は大正九年三月以来のことで共に牧口初代会長のもとで机をならべて、心の底から語り合うようになってからのことであります」とある。参考までに、前掲『牧口常三郎』、75頁の西町尋常小学校の大正9年の卒業記念写真の最上段右から2人目に窪田はいるが、戸田はいない。

<sup>(107)</sup> 前掲「牧口先生と私」『灯台』1971年3月号、61頁。

<sup>(108)</sup> 前掲「人間革命 37」。気象庁のデータで、1920（大正9）年3月下旬の夜にドシャ降りだったと思われるのは、3月22日（月）20時前後と3月29日（月）23時前後である。

<sup>(109)</sup> 『若き戸田城聖（一）』月報（和光社 1974年）、9頁。戸田は、1921（大正10）年8月31日の日記に、「我れに絶大の意気を与えたるは木下乙市先生なり」（前掲『若き日の日記・獄中記』、92-93頁。）と書いている。

をしていた。私はなんとなく米国かブラジルへ行きたくてこれに入ったのだが、キリスト教は最初は嫌いだったねえ」と語っている<sup>(110)</sup>。支部は、北海道師範学校入学前にブラジル移住を考え、父親に反対され断念している。戸田の力行会への入会に、支部の影響はなかっただろうか。また、戸田城外名の普及英語学校<sup>(111)</sup>の1920(大正9)年3月の授業券が残っている<sup>(112)</sup>。小六商店の同僚で親友となった森田正吉が、1916(大正5)年に上京し、正則英語学校に入学しているが、森田からの情報と影響もなかっただろうか。

第二に、1920(大正9)年に開成予備学校<sup>(113)</sup>で学び<sup>(114)</sup>、高等学校入学資格検定試験(高検)<sup>(115)</sup>合格を目指した。戸田は、1921(大正10)年8月31日の日記に「高等学校入学資格試験、専門学校入学資格試験、ひいて[は]一高入学を、今日一步の試み、志として奮うなり」<sup>(116)</sup>と書いている。

ここで、戸田甚一に対して牧口常三郎への「紹介状」を書いた人物について検討しておきたい。

1. 戸田は水滸会で「堀さん(牧口先生と同窓会でお目にかかっただけで話されたこともないという)の紹介状をもらって牧口先生を訪問した」<sup>(117)</sup>と話している。
2. 『聖教新聞』連載の「人間革命」では、「北海道の先輩原さんから紹介を受けて伺った」<sup>(118)</sup>と書いている。
3. 戸田テルの娘・加清蘭は、『若き日の日記・獄中記』の註に、「牧口常三郎は、戸田の母と知り合いであった」<sup>(119)</sup>と記している。

<sup>(110)</sup> 小口偉一編『宗教と信仰の心理学』(河出書房 1956年)、34頁。

<sup>(111)</sup> 「私立普及英語学校学則」(東京都公文書館所蔵)によれば、同校は東京市神田区小川町1番地に位置し、戸田が受講したと考えられる「中等英語科」は、入学資格が尋常小学校卒業者及之と同等以上の者であり、中学校卒業者と同等の英語学の修得を目指す課程である。修業年限は前期三カ月後期三カ月の六カ月である。午前、午後、夜間の三部があり、それぞれ毎週18時間の授業が組まれていた。1919(大正8)年6月に学校設立願が出されており、設立者は伊藤豊守、専任教員は、伊藤の他、内山常治、佐川春水、山崎甲斐之助の3人、兼任教員には榎本泰夫がいた。

<sup>(112)</sup> 「授業料は毎月三日迄に納付すべし」とある。3月の初旬には戸田は上京していたということか。

<sup>(113)</sup> 開成予備学校については、『開成・昌平史』(開成・昌平史編集委員会 1991年)による。同校は、東日本国際大学の前身にあたる。

<sup>(114)</sup> 開成予備学校の学籍記録で戸田の在籍を確認することは出来なかった。細井清一(日達の本名)の記録はある。細井は同じクラスに戸田がいたと証言している(『大白蓮華』1964年1月号、聖教新聞社、43頁)。『読売新聞』1917年3月18日、5面には、「開成豫備学校の現況 神田淡路町の同校は夜間教授にして晝間業務を執る者の爲め中學の課程を速修せしむるを目的とし卒業生を出す事三百人、各種専門学校受験者の便を計る由」とある。

<sup>(115)</sup> 前掲『創価学会三代会長年譜 上巻』、200頁の記述に従った。前掲『開成・昌平史』、11頁では、開成予備学校は、1918(大正7)年12月に専検指定校になっている。同校で戸田が学んだ目的は何かは課題。

<sup>(116)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、93頁。

<sup>(117)</sup> 水滸会記録による。

<sup>(118)</sup> 前掲「人間革命」37頁。

<sup>(119)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、94頁。

まず、3の加清蘭の祖母である「戸田の母」と牧口との関係については、それを立証する証言や資料はみつかっていない。厚田小学校卒業生には、牧口の出身地である新潟県刈羽郡荒浜村に多い「牧口」、「品田」姓はいるが、荒浜村に彼らの親戚がいたかどうか確認できない<sup>(120)</sup>。筆者は、3ではないと考えている。その理由は、もし牧口常三郎が戸田の母と知り合いであり、そのついで牧口と会ったのなら、戸田はあえて紹介者の名前をあげることはないと考えるからである。

戸田が卒業した厚田小学校、および、就職した真谷地小学校には、「堀」、「原」姓の教員はいない。そこで、戸田の発言にあった「(牧口と)同窓会であったことのある」に着目し、牧口と同窓の北海道札幌師範学校<sup>(121)</sup>卒業生で「堀」、「原」姓の者を抽出し、資料6を作成した。

同校の同窓会『会報』の「会員の近況」欄に、牧口について「北師の同窓で上京する者は一度は訖度訪問する、それには深い譯がある。今日市の内外で教職に就いてゐる同窓の大部分は直接間接君の盡力に依つてゐるといふ事なので同窓からは勿論市の教育者間から非常に尊敬を拂はれてゐる」<sup>(122)</sup>とある。牧口は、上京後も母校の後輩の面倒をよく見ていた。

#### <資料6> 1919(大正8)年3月までの北海道札幌師範学校卒業生で「原」、「堀」姓の者

No	卒業期	卒業年月	氏名	大正6年6月の『会報』記載の赴任校等	大正9年7月の『会報』記載の赴任校等	備考
1	24	明治43年3月	原 寛	三石郡三石校	三石郡三石校	
2	27	大正2年3月	原 昇一	上川郡剣淵村	上川郡剣淵村	
3	27	大正2年3月	原 陸一	上川郡旭川校	上川郡名寄校	
4	30	大正5年3月	原 五郎	勇払郡鷓川校	勇払郡鷓川校	
5	30	大正5年3月	原 喜久治	旭川区上川第三校	旭川区北門校	
6	二部2	明治43年3月	原 正夫	室蘭製鉄所	室蘭製鉄所	昭和7年には、府立札幌第一中学校勤務 <sup>(123)</sup>
7	29	大正4年3年	堀 規矩男	夕張郡杵臼校	夕張郡沼の沢校	

<sup>(120)</sup> 明治21年より明治33年までの厚田村759戸のうち新潟県出身者は50戸と、青森、石川、山口に次いで多い。これは北前船による交通の便利さによるものと思われる(木滑二郎「厚田村における移住の状況と戸口の推移」『厚田村史料室紀要』第8号、厚田村資料室、1967年、10-16頁)。

<sup>(121)</sup> 牧口が卒業した北海道尋常師範学校は、途中校名を何度か変更している。本稿に關係する、1898(明治31)年から1914(大正3)年3月までは、北海道師範学校、同年4月からは北海道札幌師範学校である。資料6では、一括して、「北海道札幌師範学校卒業生」とした。

<sup>(122)</sup> 前掲『会報』第13号、4-5頁。また、『大日本現代教育家銘鑑 第貳輯』(教育実成会 1915年)、711頁でも、「同窓中氏を尊敬し氏を欽慕せざる者なく」と紹介している。

<sup>(123)</sup> 『会報』第21号(北師同窓会、1932年)、69頁。

8	31	大正6年3年	堀 恭二	東京高等師範	東京高等工業学校	昭和7年には、大阪医科大学 <sup>(124)</sup>
9	32	大正7年3月	堀 一良	(在学中)	夕張郡丁末校	
10	乙講習3	明治45年	堀 卓磨	茅部郡落部校	亀田郡亀尾校	

大正6年の赴任校は、『会報』第十号（北師同窓会 1917年）、大正9年の赴任校は、『会報』第十二号（北師同窓会 1920年）により作成した。

資料6を作成することにより、2人の人物が浮上した。一人は支部の勤務する沼の沢小学校の「堀規矩男」であり、もう一人は「堀 恭二」である<sup>(125)</sup>。

堀規矩男は、以下の条件を満たしている。

- 1 戸田は、妹と支部のいる沼の沢小学校を度々訪問しており、堀と面識がある。
- 2 1917（大正6）年8月15日に札幌市内で同窓会総会<sup>(126)</sup>が行われ、そこには同年8月12日に空知教育会の夏期講習会（岩見沢尋常小学校）で講演<sup>(127)</sup>した牧口も参加した可能性が高い。この空知教育会は、夕張郡も含む空知支庁の教員で構成されており、堀規矩男は講習会で牧口の話を書くチャンスはあったが、受講していない<sup>(128)</sup>。北海道在住者が、東京に住む牧口と同窓会で会う機会は稀である。彼は、「同窓会であっただけ」という要件を満たす可能性がある。
- 3 堀規矩男の北海道札幌師範学校の同級生である鈴木重敏は、東京で教職に就きたい旨を牧口に相談し、返信の葉書を受け取っている（この葉書は、1920<大正9>年頃と推定している）<sup>(129)</sup>。この牧口との交信は同級生である堀も聞いている可能性がある。

つまり、堀規矩男は、確実な証拠はないが、戸田と面識があり、牧口と同窓会で会った可能性もあり、二人を結ぶことのできるポジションにいるということである。

次に、堀恭二は、戸田の日記『奮闘』の1920（大正9）年の中に出てくる。

#### 人物集

今日役立つ可しと目せる人間未来如何なる変轉あるや知らず只国家の為記すのみ

堀恭二、瓜生公象 川瀬宏親、全親則 高木庄作 森田政吉 加清保 以上

<sup>(124)</sup> 同上、48頁。

<sup>(125)</sup> 堀一良は、同じ夕張の学校におり地理的には戸田と面識があったかもしれないが、「牧口先生と同窓会でお目にかかっただけ」という条件は満たさない。なぜなら、彼が卒業した後、戸田が上京する1920（大正9）年1月までに北海道に牧口は行っていないからである。他の7人は、地理的に考えて戸田との接点は考えにくい。

<sup>(126)</sup> 『北海タイムス』1917年7月27日、3面。

<sup>(127)</sup> 『空知教育』80号（空知教育会 1917年）、26頁。

<sup>(128)</sup> 同上、講習会参加者名簿に堀規矩男の名前はない。

<sup>(129)</sup> 前掲「牧口常三郎新資料紹介（1）」『創価教育研究』第2号、259頁。

戸田と川瀬宏親(蒼天)、親則の兄弟は、真谷地で出会い深い友情を培った。森田政吉<sup>(130)</sup>は、正吉のことで、小六商店以来の親友である。加清保は、森田と同じ当別村(厚田村の隣村)出身で森田を介して戸田と親しくなり、後に戸田の妹テルと結婚している。加清は、北海道札幌師範学校を1922(大正11)年に卒業した。しかし、戸田と堀恭二、瓜生公象、高木庄作との関係は全くわからない<sup>(131)</sup>。

堀恭二について明らかなのは、次の点である。

1. 1917(大正6)年3月に北海道札幌師範学校を卒業し、道内の小学校には赴任せずに上京、東京高等師範学校に入学している(同校は中退)。
2. 堀規矩男の北海道師範学校の2年後輩である。二人が学生時代に面識があってもおかしくない。
3. 1920(大正9)年頃は、在京在住の北海道札幌師範学校卒業生の集いが、「在京北師同窓会」として毎年行われていた。そこには、堀恭二のように、東京高等師範学校在学生も参加している<sup>(132)</sup>。牧口と堀恭二は同窓会で会うことはできた。

戸田が、堀恭二を「人物集」の筆頭に挙げているということは、なんらかの深い関係があったと考えてまちがいない。

以上のように、牧口への紹介状を書いた人物を明確に特定するまでに至っていない。支部は、戸田との再会を語る中で「(戸田は)夕張の先生から東京にとびだして苦労したらしい。結局は、早いころの北師出身の牧口(第六回生とか)という人が、校長をしていたのでその小学校につとめることになったそうだ<sup>(133)</sup>と述べている。この書き方からは、支部が牧口への紹介を行ったとは思えない。筆者は、上京した戸田が万来尽きて<sup>(134)</sup>堀規矩男に東京で親切でかつ有力な人物への紹介状を依頼したのではないかと考えている。戸田が堀規矩男と連絡を取り、彼自身に書いてもらったか、もしくは、後輩の堀恭二を紹介してもらい、彼に書いてもらったのではないだろうか。戸田は、30年以上経っているとはいえ、『人間革命』では「原」としている。紹介状を書いた人物とはそれほど親密な関係ではない。堀恭二の方かもしれない。

#### f. 37年を経た二人の再会とそれ以降

真谷地と沼の沢と近い場所で交流を続けてきた支部と戸田の二人であったが、戸田は1920(大正9)年3月<sup>(135)</sup>に上京し、牧口が校長を務める西町尋常小学校の臨時代用教員となった。その

<sup>(130)</sup> 戸田は「森田政吉」と書いているが、本稿では戸籍上の「森田正吉」で統一した。

<sup>(131)</sup> 1920(大正9)年の戸田の人脈は、北海道時代以外では、開成予備学校・普及英語学校の教員・同級生、力行会関係者、西町小学校・三笠小学校の教員等、川瀬兄弟の友人などが考えられる。

<sup>(132)</sup> 大和資雄「大正のころの藻岩会」『藻岩会あゆみ』(藻岩会 1984年)、4頁。大和資雄は、北海道札幌師範学校を堀恭二と同年に卒業し、他の2人と共に東京高等師範学校に入学している。

<sup>(133)</sup> 前掲『新日記 1957年』、336頁。

<sup>(134)</sup> 前掲「人間革命 37」では、「いよいよ食えなくなって先生の許へ」と表現している。

<sup>(135)</sup> 前掲『新日記 1957年』、320頁に、「大正九年三月、夕張でわかれてから」とある。

後、37年ぶりに二人が再会する<sup>(136)</sup>のは、1957（昭和32）年5月13日<sup>(137)</sup>、戸田が、創価学会第二代会長戸田城聖として札幌に來道した時である。支部は、

去年の五月、創価学会長として、華々しく札幌にのりこんできた時には、大正九年三月一別以来の面談で、大いに御馳走になった<sup>(138)</sup>。

一方は天下の大樹。海外までも枝をひろげた大物、こちらは目にもとまらない雑草の一本、大正九年から四十年ぶりのめぐりあわせ、自分にとっては、なんといったらいいか、まったく劇的な面談の一日であった<sup>(139)</sup>。

と書いている。しかし、二人が会うのはこれが最後になった。

1958（昭和33）年4月2日に戸田が亡くなった後、支部沈黙の日記<sup>(140)</sup>には、戸田の訃報記事の切り抜き2点<sup>(141)</sup>が貼られ、戸田の葬儀を報じた新聞記事の切り抜き1点も挟んであった。以下、日記から戸田に関する部分を抜き出してみる。

四月四日（金）

この日、午前給仕が電話の旨を伝える。創価学会の東京本部に行くので、会長に何かこと伝えてあげばというのである。こっちははつきり伊藤夫妻のどちらかも行くのであろうとがてんした。四時の急行で立つというのである。いい機会だと思った。（中略）こっちは、例のズボラなところもあって、そのままに礼状も出してない始末だったから、それではと、手紙を持つて行つてもらふことにした。

四月十二日（土）

故戸田城聖の住所をきくために伊藤氏宅へ行く。珍しい写真を見る。厚田小学校時代の戸田君の顔。

四月十四日（月）

東京の戸田城聖未亡人宛香奠を送る。中に一文を入れる。

<sup>(136)</sup> 1957（昭和32）年5月の戸田城聖の北海道・札幌滞在は、12日から14日。二人の再会は、5月13日。この時の様子を支部は、『北海道教育評論』1969年1月号から3月号の「厚田今昔物語」の中で詳しく述べている。支部は、戸田と再会した当日の朝、戸田の妹・テルから「五ジハンマデニコラレヨ」という電報を〔江別〕小学校で受け取っている（『新日記 1957年』では、317頁）。戸田が札幌に滞在している5月12日、13日のうち、12日は日曜日で、午後には創価学会の第1回北海道総会も開催されている。2人の再会は、5月13日（月）の夜と考えられる（長島前掲論文、20頁）。

<sup>(137)</sup> 戸田は、1957（昭和32）年5月12日の日航二便で札幌へ（『北海タイムス』1957年5月12日朝刊、2面、「空の往来」）、5月14日の日航一便で東京に戻った（『北海タイムス』同年5月15日夕刊、1面、「空の往来」）。

<sup>(138)</sup> 前掲『丘のひまわり』、107-108頁。

<sup>(139)</sup> 「厚田今昔物語・3 戸田城聖のことなど」『北海道教育評論』第22巻第1号（北海道教育評論社 1969年）、54頁。

<sup>(140)</sup> 支部沈黙『第七号 自昭和二八、八、二一 至昭和二三、一一、一八』（江別市情報図書館所蔵）。

<sup>(141)</sup> 『北海道新聞』1958年4月4日朝刊、4面。『北海タイムス』1958年4月5日朝刊、3面。

四月十六日（水）

「厚田の人々」の続きとして、城聖のことを書こうと思う。

四月二十八日（月）

一時間程待ち間に、週刊朝日<sup>(マツ 刊)</sup> 朝日<sup>(142)</sup>を見る。戸田城聖の死についての記事。

五月十四日（水）

伊藤氏を通して、創価学会の機関誌「聖教」札幌支部から何か原稿をと依頼されたので、昨年書いておいた「T君の場合」を整理しはじめる。これは、「紅」に連載しようかと思っていたのであった。が、それの方には、この間詩を一つやつてあるし、それでなくともよいと思う。山形のH氏から来信。城聖の葬式の写真など入れて来た。東京まで行つて撮影してきたもののようにも思える。

五月十五日（木）

金に心配がない人ほどに、次の問題が大きくなる。結局は死の問題である。それによつてすべてのことが、無意味になるか。意義あるものかになつてくる。生死の問題即価値観である。そこに信仰の話になつてきたというのも、近頃、戸田城聖の死が、自分のまわりにかかなり色濃い問題として立ちこめているからであった。

六月七日

児童文集に入れる、戸田城聖の文を『囁き』から選んで昼のうちから書きはじめる。

支部沈黙は、同年9月に出版した『丘のひまわり』に、「(故戸田城聖は、) 立志伝中の人で、全く惜しいことをした。戸田君のことについては、もっともっと書いておこうと思う」と書いている。その言葉通り、彼は戸田との思い出を機会あるごとにふれている。

#### <資料7> 支部沈黙が戸田城聖（甚一）について言及した著作

No	発表年	発表した書籍・雑誌	内 容
1	1958（昭和33）年	『丘のひまわり』	出蘭集の冒頭に「寂しき厚田」を掲載し、その前後に戸田との交流を注記する。
2	1969（昭和44）年	『北海道教育評論』 <sup>(143)</sup>	「厚田今昔物語」3から6に「戸田城聖のことなど」を4回連載で書く。4回目が支部の絶筆となる。
3	1958（昭和33）年	随筆誌『紅』第11号	「大正時代の思い出—厚田の人々」で、戸田についてふれる。
4	1959（昭和34）年	随筆誌『紅』第17号	「大正時代の思い出—厚田の人々 その三」で、戸田と一緒に植樹に行ったことにふれる。

<sup>(142)</sup> 『週刊朝日』1958（昭和33）年5月11日、42—43頁に、「フラッシュ 15万人のお題目 戸田城聖会長の葬儀」という写真記事がある。

<sup>(143)</sup> 支部沈黙の北海道師範学校の同級生である石附忠平が、1949（昭和24）年より社長をつとめる北海道教育出版社が発行。

5	1962 (昭和37) 年	『蟻の足あと』	『紅』第11号掲載の文に加筆か。「厚田の人々—大正時代のあれこれ—」として、戸田についてふれる。同内容の初出 <sup>(144)</sup> では、厚田のことはふれていない。
6	1966 (昭和41) 年	別冊『紅』第壹輯	「厚田の人々」として、『紅』第11号の「大正時代の思い出—厚田の人々」を再録。
7	1969 (昭和44) 年	別冊『紅』第貳輯	「大正時代の厚田」として、『紅』第17号の「大正時代の思い出—厚田の人々 その三」を再録。
8	1966 (昭和41) 年	『北師石狩』	「ふらふらの記」で、戸田を担当したことについてふれる。
9	1970 (昭和45) 年	『支部沈黙作品集 下巻 ＜散文編＞』	「物語、北海道文学盛衰史—出版記念の日—」において、戸田甚一と妹・テルについてふれる。『物語、北海道文学盛衰史』は、1967 (昭和42) 年に出版された。
10	1970 (昭和45) 年	『支部沈黙作品集 下巻 ＜散文編＞』	「北海道の“児童文学”について」において、「少し余談になるが」と前置きして、戸田についてふれる。初出 <sup>(145)</sup> では、ふれていない。
11	1970 (昭和45) 年	『支部沈黙作品集 下巻 ＜散文編＞』	「十月三日」において、厚田小学校に赴任した大正2年10月3日前後を書く中で、戸田についてふれる。
12	1967 (昭和42) 年	厚田小学校『開校九十周年記念誌』	「厚田まんびつ—エチケット抜きの一と一—」で、戸田についてふれる。『支部沈黙作品集 下巻＜散文編＞』収録。

支部沈黙は、1957 (昭和32) 年5月の戸田との再会までは、戸田を語ることはなかった。しかし、再会から1年もたない1958 (昭和33) 年4月に戸田の死の報に接する。「近頃、戸田城聖の死が、自分のまわりはかなり色濃い問題として立ちこめている」と日記に書いているが、支部は戸田のことを機会あるごとに著作の中でふれるようになる。それは、偉業を成し遂げ若くして逝った「初めての教え子」であり、8歳下の弟のような存在でもある戸田に対するやむにやまれぬ表現であったのかもしれない。

支部は亡くなる1カ月ほど前に、「[戸田は、]第二代の創価学会の会長として、その功罪は、人々によって、どう評価しようと、なんといっても偉大な人物であったと思う」<sup>(146)</sup>と。また、「とく

<sup>(144)</sup> 『江別報知新聞』1959 (昭和34) 年1月1日から連載された「蟻の足あと」。北海道立図書館に同連載の切り抜きが所蔵されている。

<sup>(145)</sup> 「童謡のことなど—文学展にふれて—」『にれの木』第18号 (日本児童文学者協会北海道支部 1966年)、25—28頁。

<sup>(146)</sup> 前掲「厚田今昔物語・3 戸田城聖のことなど」、『北海道教育評論』第22巻第1号、54頁。

に戸田君の場合は、ほんとうに見るものを見たような気がして、愉快でたまらない<sup>(147)</sup>と綴っている。

## 5. 戸田甚一が投稿した各作品について

支部沈黙は、『囁き』に投稿した戸田の作品について、『丘のひまわり』に掲載された「寂しき厚田」に、「これは、故戸田城聖が十九才のころの遺文である。(中略)彼の後世が、この文の中にも、何かほの見えるような気がする。このほかにも、数篇あるが、今となつては、貴重な文献であろう<sup>(148)</sup>と述べている。また、日記には、『囁き』にも、何か文筆を送つてきて、のせたような気もする。文学的ではなく、どつちかという思想的な傾向のものだつたと思う<sup>(149)</sup>と記している。

加藤郁代が所蔵していた『囁き』の合本2冊には、2011年春に発見されたコピーになかった作品があり、『囁き』に投稿した戸田の作品は、20となった。内訳は、散文8篇、詩4篇、短歌4首、俳句12句である。『若き日の日記・獄中記』には、それ以前に詠んだ和歌3首と俳句1句も掲載されているが、公表された作品としては、『囁き』に投稿した作品が最初のものである。

### <資料8> 『囁き』に投稿した戸田甚一の作品一覧

作品番号	題名	ペンネーム	頁の位置	コピー番号	掲載頁	掲載年月	通号
1	寂しき厚田	櫻桃	横	26-28	五、六、七	大正7年5月号	4号
2	顔知らぬ女の病めるを聞きて	あかん坊	横	24、25	二三、二四	大正7年6月号	5号
3	若人	あかん坊	横	22、23	六、七	大正7年7月号	6号
4	俳句	あかん坊	横	22	七		
5	◎	あかん坊	横	20、21	九、十、十一		
6	孤獨になく乙女	あかん坊	横	19	十一	大正7年8月号	7号
7	世の中	あかん坊	横	18	十二	大正7年9月号	8号
8	俳句	あかん坊	横	17	十七	大正7年11月号	10号
9	楽しかった旅日記	あかん坊	上	15、16	1-3		
10	招魂祭	あかん坊	上	13、14	41-42		
11	無題	あかん坊	上	12	8-9	大正8年1月号	11号
12	くどき節	あかん坊	上	11	31-32		
13	きかれましたら答へたい	あかん坊	上	9、10	34-36		
14	南瓜	あかん坊	上	7、8	39-40		
15		あかん坊	上	6、1	49-50		

<sup>(147)</sup> 「厚田今昔物語・5 戸田城聖のことなど その3」『北海道教育評論』第22巻第3号(北海道教育評論社 1969年)、221頁。

<sup>(148)</sup> 前掲『丘のひまわり』、104-105頁。

<sup>(149)</sup> 前掲『新日記 1957年』、355頁。

16		あかん坊	上	1	50		
17	故郷	あかん坊	上	1、2	59-52		
18	私のすきな月夜	あかん坊	上	5	23	大正8年2月号	12号
19	和歌	櫻桃	横		十六	大正7年5月号	4号
20		あかん坊	上		14	大正8年2月号	12号

《作品 1》 寂しき厚田

この作品は、1918（大正7）年5月号、通号第4号に掲載されている。

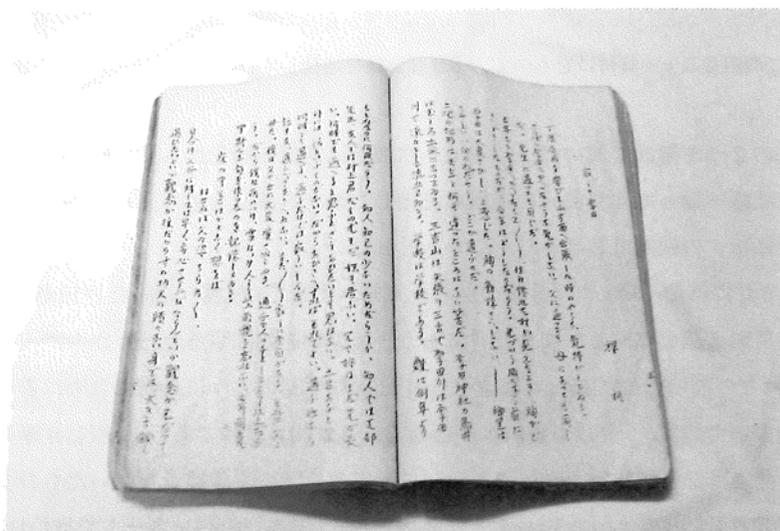


写真4：「寂しき厚田」（『囁き』大正7年5月号より）

中本博は、この作品を、1918（大正7）年3月×日の日記とした<sup>(151)</sup>。しかし、戸田の「金銭出納帳」（抜粋）から見えてくる以下の行動日程とは相違する。なお、戸田の所在地と移動を示すため、〔 〕に所在地と移動を示し、下線を付した。

1918（大正7）年4月22日	生田さんの御母さんより借用	12円	〔札幌〕
	汽車賃 小樽中央まで	35銭	〔小樽へ移動〕
23日	葡萄酒 支部先生へ土産	80銭	
	甥への土産として せんべい	20銭	
	厚田の親戚へ土産 鏡他	1円80銭	
25日	<u>小樽ヨリ厚田マデ汽船賃</u>	<u>1円20銭</u>	〔厚田へ移動〕
	厚田ニ於テ正三ニ土産菓子	15銭	
29日	囁き会費	12銭	
	小田桐さんより餞別	1円	
	石狩ヨリ札幌マデ	55銭	〔札幌へ移動〕

(151) 前掲『若き戸田城聖（二）』、266頁。

中本が根拠としたのは、『若き日の日記・獄中記』の以下の記述である。

戸田晴通は、[生田家に]報恩せねばならず、国忠侠櫻桃は人の弱さを援けねば。万難を排して援助の約束をしてしまった。直ちにその足を以って④より病気を申し立てて閑をとり、小樽へ飛び、その足で厚田へ帰って最後の別離を人知れずして札幌へ帰った。(略)

(大正七年四月二十一日)

この日記に対する編者の註として、

戸田はこの四月二十一日付けをもって、④合資会社を退社している<sup>(152)</sup>。

とある。この2つを続けて読めば、戸田は小六商店に病気休暇を出し、小樽へ行き、その足で厚田へ帰って札幌へ帰って4月21日に退職届を出したのだと誰しも思う。そこから、逆算して中本は「寂しき厚田」の執筆は3月としたのかもしれない。

しかし、3月に厚田へ帰って「最後の別離を人知れずして」札幌へ帰った戸田が、「金銭出納帳」にあるようにお土産を準備して4月25日にもう一度厚田を訪問するだろうか。戸田の日記の原文では、日附はこの前の部分にある。『若き日の日記・獄中記』のように最後に日附は書いていない。この部分を書いたのは、「金銭出納帳」からみて、4月29日以降である。「寂しき厚田」は、1918(大正7)年4月25日に小樽から船で厚田村に帰省した時の心象風景を書いたものである。

大正7年5月号に掲載された作品1と作品19のみ、「櫻桃」のペンネームで書かれている。「櫻桃」は、同年4月21日付とされる日記にも出てくる。「寂しき厚田」は、戸田の処女作である。また、投稿規定の字数を大幅に上回っている。

#### 《作品 2》 顔知らぬ友の病めるを聞きて

この作品は、1918(大正7)年6月号、通号第5号に掲載されている。

作品名が、「顔知らぬ友の病めるを聞きて」であるが、後半で、「彼の心根病床他郷なれば唯人で慰ぐさむる只書を姉にして以て僅か慰め得たりと」、「我れ姉にせし彼の書によつて彼我知り其心情を<sup>アツ</sup>癒しても我れをして一滴の涙を落さしむ」とあるように、戸田は、病める「顔知らぬ友」から手紙をもらっている。さらに、「姉の曰く彼を当地に引かなむと来れ〇〇よ」と呼びかけている。この姉とは、夕張に住む長姉・村上ツネと考えられる。「顔知らぬ友」はツネに手紙を送り、ツネも夕張に彼を呼びたいと言っている。「顔知らぬ友」、「〇〇」と書いているが、戸田が知っている人物であることは明らかである。

<sup>(152)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、63-65頁。原文は、「戸田晴通は報恩せねばならず国忠侠櫻桃を人の弱さを援けねば到<sup>(アツ)</sup>抵 虫の修まらぬ人間萬難を排して援助の功を修めねばならぬと堅く約束してしまった[の]で後には引けず直ちに其の足を以って④より病気を申し立てて閑をとり小樽へ飛びて其の足で厚田へ帰って最後の別離を人知れず飲んで札幌へ帰った」である。

文頭の「身は北國の一寒村に生れて」は、支部沈黙の故郷宮城県、「師範学校二ケ年の生活敢て樂しとせず遣る二ケ年の平和と終生安樂なる可き月給といとも清き天職とを弊履を捨つる如く打ち捨て」は、支部の師範学校2年中退と重なる。

「あかん坊 汝に守してもらはむに」と、文中にペンネームのあかん坊が出てくる。「顔知らぬ友」に私を守ってほしいと訴えかけ、「我が友よ病の試験場を突破せよ 隋<sup>(ツツ)</sup> 落する勿れ、汝の功成るを待つは父母のみに非ざるなり」と、戸田は「顔知らぬ友」に熱いエールを送っている。戸田が「汝に守してもらはむに」と思う相手は支部沈黙ではないだろうか。「あかん坊」という戸田のペンネームはここから生まれたのではないかと筆者は考える。

支部は、以前より健康体でなく、厚田小学校に赴任したのは療養の意味もあつた<sup>(153)</sup>。『囁き』を創刊した支部は、病の中で編輯にあたっていたのである。

#### 《作品 3》 若人

この作品は、1918（大正7）年6月号、通号第5号に掲載されている。

写真集『戸田城聖』には、「大正7年6月24日、戸田雅皓」として、「北風寒き満洲の」から「千辛万苦は望むこと」まで、ほぼ同文の詩を書いたメモが撮影されている（『若き日の日記・獄中記』未収録）。また、戸田は同年6月8日の日記に、作品3と同趣旨を書いている<sup>(154)</sup>。作品3は、このメモと同日に創作された作品と考えられる。

#### 《作品 4》 俳句

戸田の俳句の季語は、「蒲公英<sup>たんぽぽ</sup>」「春雨」であるが、この作品は、1918（大正7）年7月号、通号第6号に掲載されている。

#### 《作品 5》 ◎

この作品は、1918（大正7）年7月号、通号第6号に掲載されている。

「今朝幸ひ、閑暇あるまゝ歩を円山公園に運びて一日清遊す。」との表現は、札幌在住の、小六商店の小僧としての多忙な時期ではなく、病氣療養中もしくは退職後のことであろう。「何の木ならん白き花、衣を着けたる高き木は（中略）微風に誘はれてか二片三片ひらゝと白雪をふらした」の白い花は、5月、6月に花を咲かせるアカシアであろうか。

戸田は、1918（大正7）年1月24日、仙場病院を退院、同年4月21日に小六商店を退社している。その後、厚田への帰省、さらに新篠津の森田正吉を訪問、さらに、北見の美幌を訪問した<sup>(155)</sup>

<sup>(153)</sup> 『新日記 1957年』、132-133頁に、「ここで、今のように健康ではなかつたにしても、青春のころの宿である。帰る家のない者にとっては、ここが世界の楽土であつた。もつとも、病氣保養のつもりで来たものとはいえ、よく遊んだ」とある。

<sup>(154)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、74頁。

<sup>(155)</sup> 同上、71頁には、「身を賽の目にまかして美幌へ行く」とある。前掲『若き戸田城聖（三）』、86頁の森

のち、夕張に行き、6月13日からは夕張炭鉱の事務員になっている。円山へ一日清遊したのは1918（大正7）年5月8日ではないだろうか（99頁参照）。

6月号で初めて出てきた「あかん坊」が、作品5では、1行目を含め2度出てくる。そして、「僕はあかん坊」とはっきり名乗っている。

《作品 6》 孤獨になく乙女

この作品は、1918（大正7）年8月号、通号第7号に掲載されている。季節を示す言葉は、「葉桜」である。札幌で葉桜の季節は4月下旬から5月上旬であり、その季節に創作された作品である。

《作品 7》 世の中

この作品は、1918（大正7）年9月号、通号第8号に掲載されている。作品7には、「案外の失策」、「案外の面白い境遇」、「案外の土地」と「案外」という言葉が使われ、「面黒い社会の一部とを経て」と自身の体験を暗喩している。これは夕張に来たことを意味しているのかもしれない。全作品にいえることだが、夕張にいることがわかる言葉は出てこない。

《作品 8》 俳句

この作品は、1918（大正7）年9月号、通号第8号に掲載されている。戸田の俳句には、「秋の雨」、「緋にもえし夏たちけらし」という季語が使われており、創作時期は初秋である。

《作品 9》 楽しかった旅日記

この作品は、1918（大正7）年11月号、通号第10号に掲載されている。作品9は、「みだし」（目次）の次の頁、1頁から3頁までに掲載されており、11月号の巻頭を飾る作品である。

「金銭出納帳」の中で、作品9と関係する部分を抜粋した。なお、戸田の所在地と移動を示すため、〔 〕に所在地と移動を示し、下線を付した。

1918（大正7）年4月29日	石狩ヨリ札幌マデ	55銭	〔札幌へ移動〕
	（この期間は書かれていない）		
5月5日	姉さんヨリ 借用	5円	〔夕張〕
	幌向ヨリ	33銭	〔新篠津ヨリ移動〕
5月8日	車賃 三人 円山行	20銭	〔札幌〕
	森田へ手紙	3銭	
5月12日	夕張汽車賃	1円17銭	〔夕張へ移動〕

田の手紙の中に「北見からがっくり肩を落として帰ってくるにちがいない」とある。誰と会ったか不明。

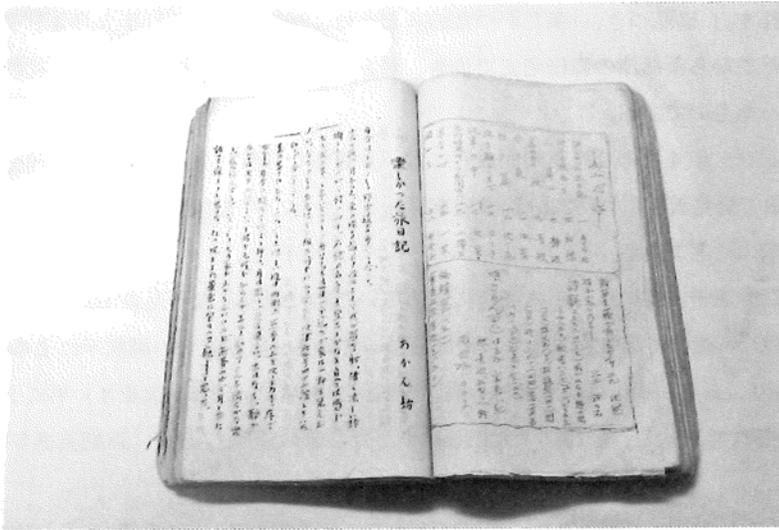


写真5：「楽しかった旅日記」(『囁き』大正7年11月号より)

「金銭出納帳」に、「5月5日 幌向ヨリ33銭」とあるが、これは、本作品の舞台である新篠津に住む森田正吉訪問の帰りの汽車賃を意味する。新篠津訪問について、戸田の日記には、

四月卅一日

夕張の姉を訪ふ<sup>(156)</sup>

(中略)

五月五日帰札す

金子五円借用

返済の期は先づ当分あるまい

帰路を新篠津にて

森田と会見し

腹藏なく半日余会談す。

我が行動を彼は非常に止

めた何の理か

亦是か非か程んど不明

心を定めて只決行するのみ

(以下略)<sup>(157)</sup>

とある。『若き日の日記・獄中記』では、この日付を大正七年五月三日としている<sup>(158)</sup>が、五月五日の出来事の日記の日附が、五月三日ということはない。日記文中の「夕張の姉を訪う。(中略)

(156) 前掲『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』、147頁では、夕張の長姉を大正7年5月3日に訪問とし、前掲『創価学会三代会長年譜 上巻』、193頁では、4月31日としている。後者が正しい。

(157) 日記の表記は、「奮闘」の原文に従った。『若き日の日記・獄中記』は、正確に翻刻されていない。

(158) 前掲『若き日の日記・獄中記』、70-71頁。

五月五日帰札す。」に基づき、「楽しかった旅日記」は、1918（大正7）年5月4日夕張から岩見沢に出て、そこから新篠津の森田宅まで歩き、翌5日、新篠津から幌向に出て、札幌に戻った時の体験を綴ったものである。

1925（大正14）年4月の『汽車時間表』には、夕張駅を10時15分に出発して、追分で乗り換えて、志文経由で岩見沢駅に13時22分着の列車がある。また、「午後幌向へと出て帰った」とある幌向は、幌向駅のことである。

新篠津北二号四十二線には、小六商店に勤めていた時に親友となった森田正吉が住んでいた。戸籍謄本では、新篠津村第41線北3号15番地となっている（信本俊一の御教示による）。二人の再会は2年余ぶりである。森田は、厚田村の隣、当別村の出身で、1915（大正4）年に小六商店に戸田より半年遅れて入社し、翌1916（大正5）年2月2日に退職し上京、正則英語学校に入学した<sup>(159)</sup>。

文中の「見る人の心々に任せ置き 高嶺にすめる 秋の夜の月」との和歌は、『小学唱歌 三編』<sup>(160)</sup>にある「見る人の心ごころに任せおきて高嶺にすめる秋の夜の月」を思い出したのである。写真集『戸田城聖』には、「反省の準 見る人の 心々に任せおき 高嶺にすめる 秋の夜の月」と書かれた戸田の色紙が撮影されている。

百頃十頃の田畝の「頃」は、田畑の広さを計る単位で一頃は百畝（信本俊一の御教示による）。「一望千頃<sup>いちぼうせんけい</sup>」という言葉もある。

#### 《作品 10》 招魂祭

この作品は、1918（大正7）年11月号、通号第10号に掲載されている。作品の冒頭に、「野辺の草木も色づきて 人の心もしめやかに 稲も実りし秋の今日」とあり、秋に創作された詩である。

#### 《作品 11》

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。この作品には、題がっていない。

#### 《作品 12》 くどき節

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。作品中には、創作時期を推測させる記述はない。

#### 《作品 13》 きかれたら答へたい

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。作品中には、創作時期

---

<sup>(159)</sup> 前掲『若き日の日記・獄中記』、9頁。

<sup>(160)</sup> 『小学唱歌 三編』（文部省 1880年）、19頁

を推測させる記述はない。

作品13のあとに掲載されている住谷治の「二年兵だより」は、新兵が入隊した2年目の正月の生活を1月4日の観兵式まで書いている。住谷が入営した第七師団は、旭川、札幌に連隊本部を置き、1917（大正6）年からは満洲に駐屯、翌1918（大正7）年8月にはシベリア出兵に参加している。住谷が大正7年11月号に書いた「新兵便り」によれば、彼は、同年に『囁き』の会員となり、その後、入営した。この「二年兵だより」の正月の生活は、1919（大正8）年1月の話である。いつ戦地へ送られるかわからない緊張状態の中で書かれており、一休の「正月や冥途の旅の一里塚 芽出度もあり芽出たくもなし」を引用しているのもその表れである。

《作品 14》 南瓜

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。作品中には、創作時期を推測させる記述はない。

同号に掲載されている静波の「風呂」という作品末には、「7. 9. 20」と日付が書かれている。これは、1918（大正7）年9月20日ということである。また、(伊藤)一笑の「大正七年の思出」には、「夏がすぎて秋の末、曇がふる一日、日頃丈夫な熊吉が、風邪で床についた。」とあり、「秋の末、曇がふる」時期までのことが書かれている。初秋、仲秋、晩秋の三秋の中で、秋の末（晩秋）は、寒露（10月8日頃）から立冬（11月6日頃）までをいう。これらの作品は、1918（大正7）年12月号が休刊になったために、1月号に掲載された可能性もあるのではないか。

《作品 15》 (和歌2首)

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。戸田の和歌には、「秋たけて」、「秋やくれん」とあり、晩秋を詠んでいる。12月号に投稿した作品かもしれない。

同じ49頁に掲載されている沈丁花の和歌には、「戸を打つ雪の音をきくかな」「雪の夜」「暖かき炬燵かこみて」「雪の日」とあり、冬の季語が続く。さらに、48頁に掲載されている散文には、「須磨子の死をさう思はんですか」という一節がある。須磨子は、新劇女優松井須磨子のことで、自殺したのは、1919（大正8）年1月5日であり、『北海タイムス』では1月7日に報じられている。この散文は、新聞等で松井の自殺を知ったあとに書かれている。

《作品 16》 (俳句2句)

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。50頁には続いて、静波の「初荷その他」と題した俳句3句が掲載されている。静波は、1919（大正8）年1月2日の初荷を詠んでいる。

《作品 17》 故郷

この作品は、1919（大正8）年1月号、通号第11号に掲載されている。この作品は、1918（大

正7)年の初めて迎えた夕張の冬に、故郷を想って作った詩である。

故郷の「奇勝のルーラン」「三吉山」はおもしろいのに、「西なる海」は当然冬だから荒れている。「奇勝のルーラン」を北として、「西なる海は怨なれ」の怨(うらみ)は何を指しているのか。それは、厚田の西、小樽の生田家のことであろう。1918(大正7)年6月に同家を訪問した戸田は徹底的に打ちのめされる。「怨を消さん種ぞ出よ」、「怨を消すの種ぞほし」と、自身の感情を消し去ろうとしている。

《作品 18》 私のすきな月夜

この作品は、1919(大正8)年2月号、通号第12号に掲載されている。

《作品 19》 和歌

この作品は、1918(大正7)年5月号、通号第4号に掲載されている。

《作品 20》

この作品は、1919(大正8)年2月号、通号第12号に掲載されている。

## おわりに

戸田甚一は、戸田城外と名前を改める。戸田は、1940(昭和15)年から1942(昭和17)年にかけて『小学生日本』(改題して『小国民日本』、『少国民日本』)という学年別学習雑誌<sup>(161)</sup>を発行する。同誌では、編集兼発行人である戸田みずからが毎号巻頭言を執筆し、彼の詩を掲載することもあった。

1940(昭和15)年4月に発行された『小学生日本 五年』の巻頭言には、戸田の「春は、四月は、我等のものだ。」という詩を掲載している。

歌へ <sup>ほが</sup>朗らかに 春の<sup>きよく</sup>曲  
舞へ <sup>かろ</sup>軽ろやかに 春の<sup>まひ</sup>舞  
伸びよ おほらかに <sup>まっすぐ</sup>真直に  
<sup>はる</sup>春は、<sup>われら</sup>四月は、我等のものだ<sup>(162)</sup>

また、同月の『小学生日本 六年』の巻頭言には、次の英国の詩人ロバート・ブラウニングの詩を引用している。

<sup>(161)</sup> 学年別学習雑誌の歴史については、『小学館の80年』(小学館 2004年)に詳しい。同書、104頁の注14に、「小学生日本社『小学生日本五年』(1940年1月号創刊)、(中略)やまと書苑『学友一〜三年生』(1940年4月号創刊)、(中略)『国民学校一〜三年』(1940年4月号創刊)。これらもまた統制が厳しさを増す中で消えていった」とある。『小学館五十年史年表 1922年—1972年』(小学館 1975年)も参考になる。

<sup>(162)</sup> 『小学生日本 五年』第2巻第1号(小学生日本社 1940年4月号)、3頁。

時は春、  
日は朝、  
朝は七時、  
丘の小草に露みちて、  
雲雀は空に囀り、  
蝸牛は枝に這い出し、  
神、大空に輝きて世をしろしめす。  
すべて世はおほらかに平和である<sup>(163)</sup>。

翌年の1941（昭和16）年2月の『小学生日本』の巻頭言には、次の「冬に鍛えよ」という詩を掲載している。

野山を一色に塗りこめて  
しろがねの雪が降る。

清浄な雪の朝  
川一筋ながとと流るゝ廣野。

陽に映ゆる高嶺は  
冴えた空に輝やく。

藪には新雪のわだちの跡もしるく  
登校の子等の聲のほがらか<sup>(164)</sup>。

戸田は、1943（昭和18）年7月に不敬罪と治安維持法違反の容疑で検挙され、2年間の獄中生活を送る。獄中では日記やメモを書くことは禁じられているが、その間戸田は和歌だけでも28首を創作している。現存する獄中の和歌は、家族にあてた書簡にあるものと、出獄後に彼が思い出して書きとめたものである。家族にあてた書簡を見ると、獄中とわかる文言は全て検閲官によって黒く塗りつぶされている。そのため、獄中で創作された和歌は肝心なところが塗りつぶされており、完全に復元することは至難である。

1945（昭和20）年7月に出獄した戸田は、逝去までの13年間に創価学会の再建と発展、青年の育成に全精力を傾けた。この間、多くの和歌を会員に贈り、励ましとした。それは、1975（昭和50）年に336首を収録した歌集『歌集 草創』<sup>(165)</sup>として出版されるが、収められていない和歌も多数あると思われる。

1947（昭和22）年8月、戸田は、19歳の池田大作青年（創価大学創立者）と出会う。戸田との出

<sup>(163)</sup> 『小学生日本 六年』第1巻第1号（小学生日本社 1940年4月号）、3頁。

<sup>(164)</sup> 『小学生日本』第2巻第11号（小学生日本社 1941年2月号）、5頁。

<sup>(165)</sup> 戸田城聖『歌集 草創』（和光社 1975年）。

会いの感動を即興の詩で表現した池田の姿に、かつて北海道夕張の地から『囁き』に投稿していた10代の自身の姿と重なるものはなかったであろうか。支部からは、「文学的ではなく、どっちかという思想的な傾向」と評された戸田ではあるが、池田の詩心とは深く共鳴するものがあったのではないだろうか。

今後、戸田城聖研究が進展していくとすれば、まず、1945（昭和20）年以降に創価学会を再建し大きく発展させた宗教指導者としての戸田が、その研究対象となるだろう。次に、1930年代の著作である『推理式指導算術』等の研究によって、創価教育学を最も深く理解している最初の実践者として光があてられていくであろう。しかし、戸田城聖（甚一）という人間にもう一步深く踏み込んでいこうとするならば、支部沈黙と出会い、その後『囁き』への投稿を通して、彼の中間に静かに培われていった「詩心」に光をあてた研究もあってもよいのではないだろうか。実はそれが、牧口、戸田、池田と続く創価の心を知るうえで、大事なカギなのではないかと筆者は考えている。

最後に、支部家、加藤家ならびに江別市情報図書館の皆様には深く感謝の意を記して、本稿を終えたいと思う。